

---

# 東方聖生伝

連夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方聖生伝

### 【Nコード】

N7517R

### 【作者名】

連夜

### 【あらすじ】

幻想郷：そこには一人の少女が居た。

彼女の名は千堂刃奈。幻想郷で生まれ育った少女である。

しかし彼女はただの人間では無く、生まれながらにして神の力の一端を宿した人間：「聖人」だったのだ！

「生」の意味を知った彼女は、この幻想郷に何をもたらすのか？そして彼女が迎える結末は？

駄文・チート・ご都合主義が織り交じったどうしようもない小説で  
す。それが嫌な方は、今すぐ戻る事をお勧めします。

## 序章

ここは何処だろう？

何も無い真つ暗な場所だ

唯一分かる事は

ここがとても悲しい場所だという事

…寒気がする

一刻も早くここから逃げ出したい

それなのに足は動かない

何故？どうして？

どれだけ疑問を投げ掛けても答えは返ってこない

返ってくるのは空しさだけ

それによって不安と恐怖が増幅する

あまりにも

苦しすぎる

気が付くと、目の前に光が見える

無意識の内にそれに手を伸ばそうとする

けどそれはとても遠くて

掴む事が出来ない

どれだけ手を伸ばしても

届かない

光は更に強くなる

光、その先にあったものは

わ……た……し………？

人里のとある家に太陽の光が降り注ぐ。少しだけ開いた窓から差す光は、少量ながらも部屋全体を照らし出している。家の中にあつた布団にその光が当てられ、モゾモゾと動き出す。そこからスツと伸び出た手が、恐らく寝ている時に顔に被せていたのであるう手拭を剥ぎ、近くの畳の上に置く。そしてその手の正体が、布団から起き上がる。

その正体は女性。中々の美人だ。

その女性はゴシゴシと目を擦りながら、思い出したかのように徐に呟く。

「…また……あの夢か………」

女性は、先程見た夢を何度も見ている。

それも二回や四回では無い。

四年間、同じ夢を見続けているのだ。

彼女はいつも、その夢に疑問を持ち続けている。

あれは一体何なのか？あれは何を意味しているのか？彼女はずっと考え続けてきた。

しかし、成果は0。どれだけ考えても、何も得られなかったのだ。

「ハア………何時になったら解決するんだろうね」

このセリフは、いつも夢から覚めた時に呟いている。もはや彼女にとっては、親しみさえ覚えた言葉だ。

彼女は布団から出て、いつもの白い袴に着替える。桶と柄杓を持って、家の隣の井戸から水を汲み、顔を洗う。柄杓で水を掬って飲み、ふうつと一息吐かせ、家に戻る。髪をとかして寝癖を失くし、身支度を済ませる。

今日も彼女は幼馴染の居る神社に行く。その幼馴染は博麗の家系の人間だ。彼女はその幼馴染に会う為に、妖怪だらけの道を飛ぶのだ。

彼女は野菜や穀物類などの食糧を持ち、西洋風の剣を背負い、家

の扉を開ける。

彼女は営業の準備を始めた店を見て、平和だな、と呟く。

「さてと……今日も行くとしますか」

彼女は意気揚々と人里を突き進む。途中で話しかけてくる人達に会釈しながら、彼女は進む。

目指すは『博麗神社』。幻想郷の最東端に位置する神社で、そこに住む博麗の巫女が、幻想郷を覆っている博麗大結界の管理を行っている、幻想郷にとって重要な場所。

幼馴染のお腹を空かした顔を目に浮かべながら、神社へ向かう。

彼女の名は

『千堂刃奈』

これは彼女の物語である……

## 序章（後書き）

初めましての方は初めまして。いつも自分の作品を見てくださっている方はありがとうございます。作者の連夜です。

まあとりあえず………うん。話す事が無い！最初だし！うん！

そんな訳（どんな？）なんで、これからよろしくお願いいたします！

## 私は生を成す者

「…ハア。困ったなあ……………」

そんな事を呟いた私は今、妖怪に囲まれています。

人が襲われてると思って降りたのが不味かったなあ…………まさか襲われてたのが妖怪だったとは。それも夜雀の。ははは…予想外だよ。

「グへへへ……………久しぶりの人間だ…！しかも女だ…！グへへ…ヤ  
つてから食っちゃまおうぜ」

「…ハア」

この馬顔した妖怪、性欲たっぷりだよ…周りも同じ様な感じだし  
……………メンドくさいなあ……………

…まあこの程度の妖怪なら、どれだけ多くても問題ないね。さつ  
さと終わらせよう。

「さあ！さつさとやらさ」五月蠅いよ「は？…て、ギャアアアア  
ア…！！！」

私は背中に背負った剣を抜き、不意打ちとばかりに馬顔妖怪の体  
を斬り裂く。力を込めた一撃は見事にクリーンヒットし、ゴトリと  
馬顔妖怪が力なく倒れこむ。

「アッー！アニキーー！！テメエ！よくもアニキを！」

「それがアニキとか弱すぎでしょ」

「何だとゴラア…！！テメエぶっ殺してやる…！！」

「やれるもんならやってみなよ                    アンタら程度の雑魚にやられる程、私は弱くないのよ」

私は剣を構え直し、妖怪達と対峙する。妖怪達は周りから一斉に襲い掛かってくる。私は空を飛んでそれを回避し、上空から霊弾を発射する。

私には霊力がある。そして魔力もある。何故か神力もある。

そして『能力』も……………

私は妖怪達を弄ぶかのように霊弾を撃ち続ける。途中、飛んで攻撃してくるヤツも居たが、そいつは剣で軽くないしてから斬り落した。脆いものである。

はてさてそんなこんなしていたら、妖怪達は全員虫の息、皆仲良く黒コゲになつたとさ。

「うう……………チクシヨウ……………」

…あら？まだ生きてるのがいたのね。まあ殺すつもりもなかったけど。

…でもこのままだと死ぬわね。体弱すぎよホント。妖怪なんだからもつと頑張りなさいよ。そんなんじゃ幻想郷で生きていけないわよ。

「……………」

私がそんな事を考えていたら、後ろから呻き声が聞こえる。そういえば教わられてた妖怪が居たんだった。

…どうしようかなあ。妖怪だから助ける必要なんて無いんだけど

……

…なんか辛そうだし、助けてあげますか。

私は夜雀の妖怪に近寄り、傷所に手を翳す。フオンと音が鳴り、私の手から緑色の薄っすらとした光が現れる。その光が夜雀を包んだかと思うと、夜雀の傷はみるみる内に塞がっていき、夜雀の傷は完全に治っていた。

「…あ、あれ？何で？」

夜雀は起き上がり、自分の体を見る。今まで傷があった場所には何も無くて、ボロボロで動かない筈の体が何故か動く、夜雀はその事に驚いているようだ。

これだけ見ると、治癒魔法で治したように見えるけど、実際は違う。これは私の能力によるもの。私は彼女の『生命力』を上げる事で、その治癒スピードを底上げしたのだ。

『生命力』

それは『生きる為の力』

私の能力は『生』を司る程度の能力』 『生』に関わる事  
ならば、大抵の事は出来る。

そのせいか、何故か私は『生』の象徴みたいになっている。止め  
て欲しいよホント。何か妙にプレッシャー感じるし。

…まあそんな事はどうでもいいとして。今はこの夜雀の子の事よ。  
どうしましょつかねえ……………って悩む必要もないな。とっとと追  
っ払っちゃおう。

「ねえ貴女」

「え…な、なに？」

夜雀の子は見た目強がっているが、内心はかなり怯えているよう  
だ。

…妖怪の首を刎ねたのがそんなに怖かったのかなあ？別に幻想郷  
じゃいつもの事だと思うんだけど……………まあ良いわ。

私は夜雀の子と同じ背の高さにして、真剣な表情で言う。

「今回はたまたま助けたけど、また会った時には助ける気はないか  
ら 何で分かる？」

「…私が…妖怪だから…………？」

彼女は私の問いに答えた

だけどそれは間違いだ。

私は妖怪だから助けられないなんて事は無い。例え、人間だろうが妖怪だろうが幽霊だろうが神だろうが、困っていたら助ける。私はそういう人間だ。

じゃあ、何故次は助けられないのか？

答えは単純明快

結局は赤の他人でしかないからだ。

高が一回会った程度のヤツを一々憶えるつもりはないし、メンドくさい。私は友人なら幾らでも助けるけど、それ以外は正直どうでも良い。唯一友達でもないのに助けるのは人里の人達だけだろう。あそこには色々とお世話になってるからね。その恩に報いようと思うのだ。

だから私はもうこの夜雀は助けない。たった一回、ここで遭遇した程度でしかないからだ。

「…という訳。分かった？」

「…うん、大体は」

「そう。それじゃあ…」

私は剣を構え、夜雀の目の前に思いっきり振り下ろす。そこまで威力はなかったものの、十分な威圧にはなった。

「…私の気分が変わる前にさっさと消えなさい。さもないと斬る」

「ひ……う……うわあああああ……!!!!」

夜雀の子は恐怖に駆られ、一目散に飛び去って行く。フラフラと安定していない翼が羽ばたき、『妖怪の山』に向かって息せき切って逃げていく。それはとても早く、あっという間に見えなくなってしまうた。命にかかわる事が分かった途端、凄く速くなつたわねえ。火事場の馬鹿力って凄いわホント。

…まあ取り敢えず、これで面倒事は片付いた。早く神社に向かう。

『あの子』の腹の虫が五月蠅くなる前にね。

## 私は生を成す者（後書き）

刃奈の「生」を司る程度の能力」はチート能力です。

具体的には……話が進めば分かりますので、割愛します。

…話す事が全くないなあ。

## 巫女と魔法使い

妖怪を退治した私は、ふらりふらりと飛び続け、目的の『博麗神社』に到着した。と言っても階段の前だけだ。

私は地面に降り立ち、ふっと境内の方を見上げる。相変わらずの長さだ。まるで天まで伸びてるんじゃないか？と思わせるその階段は見ただけで気が遠くなりそうだ。

こんな階段、飛べば直ぐなのだが、私は体を鍛えているのでこれだけは自力で上る。今までの道のりは、長くなるから飛んできただけ。そうでなきゃ走ってくるわよ。

…しかしなあ

…こんな辺境にあつて、こんな妖怪だらけの危険な道を通つて、こんな無駄に長い階段を上らされる。そんな神社に誰が来るんだらうか？そんな事するのは物好きだけだと思つわ……………

まあ私はその物好きなのだが。

…さて、行きますか！

私は思いつきり地面を蹴り、一気に階段を駆け上がった。いった…

「…ふう。到着っ」と

階段を上り終えた私は、軽く深呼吸をする。あの階段、普通に上ったら四半刻（今で言う15分）はかかるのよねー。まあ走ったから四半刻足らずで着いたけど。

それにしても、本当に人気も妖怪気も何も無いわね…これで神社なんだから驚きよね。だって神の『生』が感じられないのよ？それって神社としてどうなの？

…でも昔っからこうなのよね。十年も前からずっと。『彼女』の母親の代からずっと。

この神社には神が居ない。

…と、今はそんな事どうでも良いわ。早く行かないと『彼女』が騒がしくなっちゃっ。

私は神社の賽銭箱にいつも通りに三円を入れ、神社の中へと入っていった。

「…案の定ぶつ倒れてたわね」

私の目線の先には畳にうつ伏せで寝つ転がっている少女が居る。髪を赤い大きなリボンで留めており、赤と白で構成された、何故か脇が露出した巫女服を着ている。

…そう。『彼女』が目的の人物。名前は『博麗<sup>はくれいれいむ</sup>霊夢』。一応、この神社の巫女である。

「ハア…大丈夫霊夢？まだ生きてる？」

「…勝手に殺さないでよ」

霊夢は私の声に反応し、いかにもダルそうに、そして腹ペコだと訴えるかのように立ち上がる。一応身だしなみは整えていたようだが、ほぼ適当にやってたらしく、髪はボサボサ、服はヨレヨレで、見てるこっちが眠たくなりそうな位眠そうにしている。

…いつも思うけど本当にだらしないよね……女の子なんだからちゃんとしなきゃ駄目でしょうに…身だしなみ然り、食事然り。

「…全く、ちょっとジツとしてなさい」

私は持つてきた袋からクシを取り出し、霊夢の髪を梳かし始める。普段はこんなにならしくは無いのだが、お腹が空いていると全部適当になるのよね、この子。

私はヨレヨレな服を着させ直し、彼女を立たせる。まだ眠そうなんだけどこの子……全く。

「ほら。食事用意しておくから、貴女は顔を洗ってきなさい」

「はい…」

霊夢は桶と手拭いを持って、外にある井戸に顔を洗いに行つた。若干フラついてはいるが、いつもの事なので気にしない、気にしない。

私は持ってきた食材を手に、台所へと向かう。そして私は割烹着を着る。準備万端である。

「さてと……作りますか！」

私は特に意味は無いけど気合を入れて、私と霊夢とこれから来るであろう『もう一人』の朝食を作り始めた。

少女料理中……

「~~~~~」

私は鼻歌混じりに朝食を作っていく。ジャガイモを一口第に切り、これまた斬ったネギと一緒に湯の中に入れる。味噌を適量箸で取り、お湯の中に入れる。そう、味噌汁である。

味噌の良い匂いが開けた扉から外に漏れ出す。その良い匂いに、霊夢が釣られて戻ってきた。

「おはよう霊夢。目は覚めた？」

「ええ、お陰様でね。何か手伝える事ある？」

「そうねえ……それじゃあ、その魚引っくり返して。そしたら

「ご飯もよそつてくれると嬉しいな」  
「分かったわ」

霊夢は先程とは違い、ハッキリとした声で返事をする。手を水で洗い、手拭いで拭き、彼女は私の隣に立ち網に載せて焼いていた魚を引っくり返す。焦げ目が付いて良い感じた。

「ご飯を盛り付け、丁度良い具合に魚が焼けてきた頃、外からとてつもない速さで此方に飛んで来た『生』を感じとった。相変わらず良い時に来る事で・・・」

「?」  
「どうかして」  
「霊夢! 朝食にきたぜ!」  
「... ああ成る程ね」

慌しくやってきた少女。エプロンの様な魔女服と魔女帽子を身に着けており、髪は金髪、年は14位だ。

彼女の名前は『霧雨魔理沙』きりさめまじさ 『魔法の森』という所に住む普通の魔法使いだ。女の子なんだけど、男みtainな口調なのが特徴。後、借りた物は死ぬまで返さないらしい。

まあ私や霊夢に対してはそんな事は無いんだけどね。

「あ、ジナじゃん。相変わらず通いつばなしだな〜大変じゃないのか?」

「そのセリフ前も聞いたわよ。何度も言うけど、私が好きでやってるんだから別に大変じゃないよ」

「そうか... まあジナが良いなら別に良いんだけどさ。それより飯出来た?」

「もう少して出来るから、ちょっと待ってなさい」  
「分かったぜ!」

魔理沙はとつと居間まで走っていった。近いんだからゆっくり行けば良いのに。

ちなみにジナとは私のあだ名だ。ジンナってのが言いづらいと言われ、ジナって略されて呼ばれるようになったの。最初は変な気分だったけど、今ではかなり気に入っている。

「相変わらず騒がしいヤツね」

「あはは…取り敢えず朝食作ろっか？」

「そうね」

相変わらず素っ気無い返事をする霊夢。昔っから変わらないわよねほんと。

…まあいいか。朝食作りに戻るとしますか。

「美味しい！相変わらずジナの料理は美味しいな！」

「私もやったんだけど」

「そうは言っても、魚を引っくり返したり、ご飯よそっただけじゃないか」

「ぐっ…べ、別に良いでしょ！何かやったんだし！」

「はいはい分かったぜ」

「ぐぬぬ…」

上機嫌に魚を食べる魔理沙に、色々と言い返せなくて軽く不機嫌

そうに味噌汁を飲む霊夢。いつもの光景だ。

三年前からずっと変わらない光景。

ずっと続いている幸せ

こんな光景と幸せをくれた世界に感謝しなきゃ。私はそう思いながらご飯を口に運ぶ。ああ美味しい。皆で食べる食事は美味しいなあ。

霊夢と魔理沙は私が七歳の時からの付き合いだ。霊夢とは妖怪に襲われた時に、魔理沙とは人里の霧雨店で出会った。

彼女達より三歳年上の私は、彼女達のお姉さん役として一緒に遊んでいた。その所為で、私は彼女達の事を誰よりも良く知っている。

誰よりも彼女達の好みを知っている。

誰よりも彼女達の癖を知っている。

誰よりも彼女達の強さを知っている。

そして……

誰よりも彼女達の弱さを知っている。

それは簡単には克服出来ないもの

だから私が助けて上げなくちゃならない。

彼女達が、自分の手で弱さを克服出来る、その日まで……

「ご馳走様」

「ご馳走様だぜ！」

「お粗末様。それじゃあ片づけるから手伝ってね」

「はい」

私達は二人と共に、食器を持って台所に行く。

そしていつも通り、私が皿を洗って、霊夢が拭いて、魔理沙が片づける。いつもやってきた為か、三人共かなり手馴れており、見事な連携プレーであつたという間に食器が片付いた。

「ふう…それじゃあお茶にしようか」

「あ、私ができるからゆっくりしててよジナ」

「そお？それじゃあ甘えちゃおうっかな」

私と魔理沙は居間に行き、ふうつと一息吐く。台所では霊夢がお茶の準備をしている。これまたいつもの光景。そして幸せの一つ。

頬杖を突いてボーっとしていると、魔理沙が思い立ったかのように

話しかけてきた。

「ジナ。そっぴやスペカ作ったか？」

「スペカ…？あぁスペルカードの事ね。作ったわよ」

私はそう言つて、持ってきた袋の中から四枚の紙を取り出す。それぞれが、赤・青・緑・白と縁取られており、様々な絵が描かれている。これがスペルカードだ。

このスペルカードは『スペルカード戦』 通称「弹幕ごっこ」と呼ばれる決闘にて使用される。

『スペルカード戦』……それは遊び感覚に近い平和な決闘。揉め事や紛争を解決する為の手段。戦闘方法は霊弾やレーザーなどの「弹幕」とスペルカードにより行われる。解りやすく言うなら、弾幕が通常攻撃、スペルカードが必殺技と言う感じだ。

この決闘方法の特徴は、絶対に殺し合いにはならないという事。この決闘の際には大妖怪であろうと、その力を完全に出す事は出来ない。それ故に異変が起きた際には解決しやすい。

…まあ裏を返せば、異変が起こしやすいのと同義なんだけどね。

このルールの成立のキツカケは、二週間前の『吸血鬼異変』と呼ばれる異変が起きたせいだ。

『吸血鬼異変』……それは巨大な力を持った吸血鬼が幻想郷を支配しようとした事件。力の衰退が進んでいた妖怪達は、吸血鬼の力に屈服したり、恐れをなして寝返ったりして幻想郷の妖怪の大半

が吸血鬼の傘下に入ってしまった。

強力な力を持っていた大妖怪達がそれを制圧しようとしたんだけど、その際に私もその戦いに参加している。たまたま通りかかっただけだったんだけど、成り行きで参加しちゃったんだよねえ……今思うと、何で拒否しなかったんだらうね……不思議だ。

勿論制圧したよ？襲い掛かる敵はバツバツサと斬り倒したし。

…ただ、気持ちの良いものでは無かった。たつた一体の妖怪を退治（と言う名の殺害）するならまだ良いんだけど……それが多くなると恐ろしくなってくる。私は『生』を感じ取る事が出来る。それはつまり、命の終わりを感知取る事が出来るのと同義だ。これは気持ちの良いものではない。

『生』の終わりは、まるで微かに残っていた蠟燭の火が消える様なもの。その火が消えると 私の心に重しの様な物が押し掛かってくる。それは一つや二つなら全然問題ない。でもそれが十にも百にもなるとその重みに耐え切れなくなってくる。

私はその異変の際にその辛さを感じた。あの時、私は何故逃げ出さなかったのだろうか？何故戦うのを止めなかったのだろうか？それは全く解らない。

唯一解っていた事は

ここで逃げたら、守るべき者達を守れなくなるという事だ。

それ以外は解らない。でも今となってはそれで良かったと思う。

何故なら　　これで幻想郷の重大な欠陥に気付けたからだ。

この異変に関わった私と妖怪達は、この欠陥を何とかする為に霊夢に相談を持ち込んだ。

そして出来たのが『スペルカード戦』だった。

…あー…嫌なのを思い出しちゃったわ…でも、私の記憶と『生』には一生残り続けるんだろうなあ…ハア…

「…大丈夫かジナ？」

私は魔理沙のその声で我に返った。見たら、魔理沙はとても心配そうな顔をしていた。

「…ううん。大丈夫よ。心配かけてゴメンね」

「そうか…？それなら良いんだけど」

魔理沙はホッと息を吐き、私のスペルカードに目を向ける。

「これがジナのスペカなんだな。　　へえ…中々面白そうなのはつかだな！」

「そお？…ちょっと嬉しいかも」

面白そう、という言葉に素直に喜んでいた。面白そう、は私の中ではある意味褒め言葉みたいになっていたからだ。

魔理沙は私のスペカを一通り見終わると、そうだ！という声を上げ、楽しそうにこちらを見た。

「ジナ！これから弾幕ごっこしようぜ！腕試しみたいな感じですよ」  
「…腕試しねえ」

…そういえば、スペルカード作ったは良いけどまだ実際には使ってなかったな。

…そうね。一回、使ってみて出来を確認した方が良いわね。

「…良いわ。お茶飲んだらやろうか」  
「分かったぜ！」

…さてと、それじゃあ霊夢のお茶を待つとしますか。

## 巫女と魔法使い（後書き）

オリ主と原作主人公が幼馴染なのは結構ありそうですが、大体は転生して、その時の記憶が残っていたりしています。

しかしジナはそんな事は無いです。

これは新しい…のか？うーむ…分かん。

あ、それとこの小説においてのスペルカード戦は、原作通りではあるのですが、少し違います。

まあそれに関しては次の話で分かるので、お待ちくださるとありがたいです。

それでは次回お会いしましょう。では。

弾幕ごっこ(前書き)

一ヶ月以上も空いてしまった……  
自分の馬鹿野郎……orz

## 弾幕ごっこ

博麗神社の境内にて、二人の少女が向かい合っていた。

一人はエプロンの様な魔女服と魔女帽子を見に付けており、箒を手に持っている

もう一人は真っ白な袴を着ており、手には西洋風な剣を握っている。

縁側には、赤と白で構成され、何故か脇が露出した巫女服を着た少女が煎れたたてのお茶を啜っている。

彼女は、この状況を暇潰し程度にしか見ていないようだ。

「準備は良い？」

袴を着た少女が、魔女服の少女に問いかける。

「いつでも良いぜ！」

魔女服を着た少女が、とても元気でハッキリとした声で返事をする。

袴を着た少女が剣を構え、魔女服を着た少女が箒に跨る。

二人の少女は、その手に霊力や魔力を溜め、大量の弾……『弾幕』を放つ。

二人の少女は、それを軽々と避け、にかつと笑う。

これから激しくなる弾幕に……胸を高鳴らせて……

二人は距離をとり、弾幕を、また放った……

「……っと。流石にただの斬り合いとはワケが違うか……」

そんな事を呟き、私は飛んでくる星型の弾幕を、ひらりひらりと避け続ける。避けて避けて……そしてこっちからも撃って撃って……そんな攻防を繰り返していた。

私は魔理沙の隙を伺うが、弾幕の雨のせいで潜り込もうにも潜り込めない。何とも難儀なものである。

これがスペルカード戦か……私はこの戦いについて改めて確認し、そして理解した。

弾幕を避け、隙について攻撃するだけで良い筈なのに、それが全く出来ない。弾幕の密度が原因でもあるが、この戦いは基本的に飛びながら行うため行動範囲が広く、攻撃を当て辛い。弾幕を撃ち続ければ良いだけの話ではあるが、そんな事をし続ければ何時かは靈力やら何やらが切れて、マトモに戦えなくなる。そうすれば相手の思う壺だ。一方的に勝られるのがオチだろう……

スペルカードを使ったとしても同じだ。幾ら強くても、回避しきれられれば終わりだ。そして、手持ちが全て切れたら完全に終わりだ。それにより、負けという結果しか残らない。

だからこそ、負けない為にも能力を上手く利用したり、ある程度作戦を練ったりする、自分自身の強化、練習を繰り返したりして慣れていったりする必要があるのだろう。

これは本当に大変だ。やるべき事が一杯出てきてしまう……

だからこそ……

面白い

私はニヤリと笑い、魔理沙を見つめる。

魔理沙は、さっきまでしていた笑い顔を止め、真剣な表情になる。私が戦っている時に笑い出したら、どれだけ危険か知っているからだ。

私は剣に霊力を溜めて、空中に斬り出す。すると、霊力を帯びた扇状の衝撃波が魔理沙に向かって飛んでいく。魔理沙はそれを危なげなくかわし、お返しとばかりに大量の魔法弾を放ってくる。

剣を使えばこの程度の威力なら簡単に斬り捨てれるが、そうすると硬直する時間が出来てしまい、回避行動が遅れる可能性がある。だからあんまりやろうとは思わない。緊急時を除いては。

私は弾幕を避けて避けて避け続けては、撃って撃って撃ち続ける。そんな中、魔理沙がピタッと止まり口を開く。

「ジナ……その顔怖いから止めてくれ。かなり鳥肌立つんだぞ、それ」

「そう？別に気にする事も無いんじゃない？」

「いやいやいや。今までの自分の行動！思い出せば分かるだろ？」

「うん、まあ分かってたけど」

「……もしかして……ワザと？」

「いや、魔理沙のその必死な顔が面白くて」

「性格悪！いや、まあ……いつもの事なんだけど……」

いつもの事とは何だいつもの事とは。事実だけどさ。

何で魔理沙が私の笑顔に恐怖を覚えたか？それは私が『戦闘狂』だという事を知っているからだ。

『戦闘狂』：それは戦いを狂おしい程に楽しむイカレた存在。血肉が飛び交う戦場を快楽とする狂人…私はそんな存在なのだ。

『生』を司る存在なのにそんな事で良いのかって聞かれると、あまり良くは無いと思う。戦いに快楽を感じるなんて完全に変態だし、色々と頭がおかしいと思われるよ絶対。

でも仕方ないのよ。これは持って生まれた性だし。逆に言えば、これが無かったら私は今頃妖怪の餌となってたかもしれない。

ある意味救われてるのよ。色々よね。

ちなみに私は、自分から戦いを仕掛けようとは思わない。

挑まれたら受ける。

そしてそれを楽しむ。  
それが私。

「何でまた笑ってるんだよ!? だから怖いって!」

「えー」

「えー? じゃない! ……こうなったら!」

魔理沙はポケットからスペルカードを取り出す。

そしてそれを掲げ、高らかに宣言する。

「魔符「スターダストレヴァリエ」!」

魔理沙のスペルカードが発動される。

発動した直後、魔理沙は箒をがっしりと握り、一気に上昇する。

そして、星の弾幕を箒に纏わせ勢い良く落下し、こちらに向かって突撃してくる。

通常ならば攻撃の直線状から離れるが、私は違う。

私は……………

このまま突っ込む。

魔理沙は一瞬顔を引き攣らせたが、すぐに気を取り直して私に突っ込んでくる。

星の弾幕が周囲に散りばめられ、死角0。普通なら突っ込まない

で、魔理沙の直線状から外れて避けながら弾幕を撃つべきなのだろうが、

そんな常識はぶち壊す。

私は足に霊力を溜め、一気に爆発させる。

『霊撃』

弾幕ごっこにおいての技の一つだ。これは周囲に力の波動を散りばめ攻撃する……要は衝撃波だ。

これはあらゆる面で応用出来る。

例えば、咄嗟に回避が不能な弾幕を消すために使ったり、落下時の衝撃を和らげたり……

動きを加速させたり。

そう……正に今私がやろうとしている事はそれだ。

私はこれを利用し、魔理沙の真下に移動する。

そして真下に潜り込んだその一瞬の時に攻撃を仕掛ける。

簡単な事じゃ無いけど、私は普通に出来る。

吸血鬼異変の時は一瞬を見極めて、バツサバツサと斬ってたしね。

私は一気に魔理沙の真下まで突撃する。

その間にも星の弾幕が降り注いでいるが、私はそれを難なく避け、魔理沙に接近する。

そして、魔理沙の真下に潜り込んだその瞬間、私は剣を振り、衝

撃波を放つ。

衝撃波は魔理沙の箒を直撃し、魔理沙の体勢を崩した。

「うお!？」

魔理沙は突然の衝撃に驚いて箒から体を落す。咄嗟に箒に掴まるが、完全に宙ぶらりんな状態。もはや格好の的だ。

「ま〜りさ 見事に宙ぶらりんね〜」

「げえ!？マズいぜ!!早く逃げ……」

「逃がさないわよ」

私は瞬時に剣を振り、衝撃波を魔理沙に叩きつける。

魔理沙は飛んで来た衝撃波に回避出来ず、当たってしまった。

魔理沙は箒と共に地上へと落下していく。しかしまだ終わりでは無い。

弾幕ごっこはやる気が残っていればまだまだ続く。

だから………

私は更なる追い討ちをかける。

「そらそらそらそらあ!」

手に霊弾と魔弾を生成し、兎に角大量に投げつける。

投げつけられた弾は魔理沙に全て直撃し、地上へと叩き付けた。

私は魔理沙が落ちたであろう地点に降り立つ。

そこには……………霊弾と魔弾でボロボロになった魔理沙がいた。

これはつまり……………

「私の勝ちね。魔理沙」

そういう事である。

「くそー……………ポンポンポン撃ちやがって……………容赦なさすぎだろ  
！」

「容赦なんてしてたらやられるもの。手加減はしないのが私自身の  
掟。悪く思わないでね」

「くつそー……………今度は負けないからな！」

「何時でも受けてたつわ」

私はそう言っつて霊夢の出したお茶を飲む。

ああ美味しい。運動した後のお茶は格別だねえ……………

「そっぴやジナ。アンタ結局スペカ使わなかったわね」

「ん？……………あ、そーいやそっぴだ」

別に使うほどでも無かったしな……………魔理沙には悪いけど。

……………あーでも、私のスペカをお披露目したかったな……………性能チエツ  
クとかもしたかったから失敗したな……………しょーがない。次の機会に

でも使いますか。

「ハア……ジナのスペカも見れないまま負けるなんて……悔しいぜ……」

「ま。次、頑張んなさい」

「そうするぜ……」

魔理沙は頂垂れながらお茶を啜る。正直やりすぎた気もしないでもないが、まあやってしまったものはしょうがない。

私は残り少ないお茶を飲み干し、置いてあつた煎餅を一枚取って齧る。ポリポリと音を立てながら煎餅を味わう。醤油味だな………美味い。

私が煎餅を齧っていると、霊夢が思いついた様に話しかけてきた。

「そういえばジナ。これからどうするの？」

「んー？いつも通り里の仕事を受け持つけど？ていうかそれ以外にやる事がな………」

ふと、周りの様子がおかしい事に気付いた私は、言葉を切り辺りを見渡す。

すると………

辺りは、赤い霧で満たされていた。

## 弾幕ごっこ（後書き）

これ投稿したら、また期間が空くかもです。

…もうね。これは気分更新にするべきかと思った。

だから過度な期待はしないでね。泣けるから。

とりあえず、次からは紅魔郷編です。

お楽しみにしていると期待を裏切るかも。

## 紅霧異変、始動（前書き）

今回は短めです。

字数はなるべく一定にしたいけど、やっぱりそうはならないねえ…  
更新の速さを取るか、長くて読み応えのある文章を取るか…

…究極だ

## 紅霧異変、始動

周囲は霧で満たされていた。それも普通とは違う、赤い霧で。

しかもこの霧には特殊な魔力が込められている。通常の魔力とは比べ物にならないほどに強い魔力だ。

誰がこんな事を………

「何だぜ？この霧。真つ赤で気味が悪いな」

「別に気にする事でも無いじゃない。見たところ体に害は無さそうだし」

「そうか？この霧結構高い魔力が込められてるぜ？明らかに人為的なものだけ」

「ふん。誰がやってんのか知らないけど、また変な事に力入れているのね」

霊夢はそう言って飲みかけのお茶を飲む。自分に影響が無いという事で完全にこの霧を無視しているようだ。それって博麗の巫女としてどうなのよ……

魔理沙はこの霧に込められている魔力に興味が湧いたらしく、原因を探ろうと行動に出ようとしているが、さっきの弾幕ごっこでのダメージがまだ少し残っているらしく動けずにいるようだ。少しやりすぎたかな？

…確かに今の所この霧には『生』に影響を及ぼすような力は無い。確かに特殊な魔力は込められてはいるが、この霧を払われないようにする為だけに込めているようにも思える。

一体そんな事をして何の意味が……私はそう考えた所で一つの推測が思い浮かんだ。

この霧は幻想郷中を覆っていると思われる。じゃあ何故幻想郷中を覆うのか？

それで浮かんだ私の推測。それは……

日の光から自らを守る為。

そう、この霧が幻想郷中を覆ってから幻想郷に日の光が差ししていない。つまりこの幻想郷で自由に行動するために日の光は邪魔になる。

じゃあ何故日の光が邪魔になるのか？私には一つ、思い当たることがある。

『吸血鬼異変』その時の首謀者である吸血鬼『デファイ・スカレット』。『ありとあらゆるものに逆らう程度の能力』を持った彼女には二人の娘が居た。

一人は『レミア・スカレット』もう一人は『フランドール・スカレット』。個々の能力は知らないが、その二人の娘は彼女程で無いにしろかなりの実力を持っていた。

もしかしたら彼女二人が首謀者かもしれない。日の光を苦手とする彼女達がこの幻想郷を自由に動く為に行っているのだろう。

恐らく狙いは私だろう……

デファイ・スカーレットを殺した、この私を……

だとすると、このまま放っておけば関係の無い『生』のまで影響を及ぼす事になる。それはさせてはならない。

それならばこちらから向かってやるのが良いだろう。そうすれば彼女達は外には出ず、私のみを狙ってくるから他の『生』への被害が無くなる。

というより『生』に被害が出ると私自身の気持ちにズシンと重いものが押し掛かるからなるべく避けたいのよね。あれって結構精神的に来るのよ？多少は慣れてきたけど。

…まあ兎に角、私が今から動けば良いよね。あいつらの狙いは私だし。

となればさっさと行動しましょうか。思い立ったが吉日。その時すぐに行動することが何事においても重要なよ。

私は剣を収納している鞘をいつも通り器具で繋ぎ背負う。殺し合いに発展したら使えるか解らないけど、一応スペカもちゃんと持つてっ…

私はあらかじめ準備を済ませ立ち上がる。目指すは『吸血鬼異変』でも行つた『紅魔館』。真っ赤な薄気味の悪いあの建物にまた行く羽目になるとはね……何か変な気分。

「ジナ……もしかして行くの？」

私が立ち上がった時、霊夢がすぐにそう聞いてきた。

「まあね。この霧には覚えがあるのよ……そう……『吸血鬼異変』の時と同じ感覚がね……」

「『吸血鬼異変』……まさかまた吸血鬼が幻想郷に乗っ取ろうとしてるのか？」

魔理沙は神妙な面持ちで尋ねてくる。

「いえ、それは違うわ。私の予想が正しければ目的は『復讐』。そう考えれば……解るでしょ？」

「……もしかして……吸血鬼の狙いは……親を殺したジナ……？」

「そういう事。このままじゃ私のせいで多くの『生』が消えちゃうからね。それだったら私から動いた方が何かと都合が良いでしょ？」

「……アンタって奴は……」

霊夢はハアッと深い溜め息を吐いて、部屋の中へと入っていった。少しして、霊夢は札やら祈願棒やらを持って私の横に降り立った。

「……アンタ一人で行かせる訳には行かないわ。この霧を出してる奴がアンタを殺そうとしてるなら尚更よ」

「霊夢……」

「勘違いしないでよ？ 私は私の生活を支えている奴に死なれちゃ困るっただけよ。それに私は博麗の巫女。異変が起きたら行動しないとね」

「……ありがとね」

「別に。私は私の為に動くだけだから」

霊夢はそう言ってそっぽを向く。表面上では何でも無いように取り繕ってるが、内心では結構心配してくれてるのだろう。霊夢は昔っからそういう子だ。

「何だ。霊夢も行くのか？ だったら早く行かないとな。手柄が取られちゃ敵わないぜ」

「アンタねえ……何で競う感じになってるのよ」

「別に良いじゃないか。それに私だって真剣なんだぜ？ ジナの命がかかってるんだ。そんなの放っておける訳ないだろ？」

魔理沙は笑顔ながらも力強く言葉を言い放った。

彼女は霊夢と違い、自分の気持ちを素直に言う。彼女はいつも私の事を気に掛けていた。少し自分勝手な所はあってもやっぱり魔理沙は良い子だ。

「魔理沙……ありがとう」

「良いって事だぜ。ただ、まだ少し体が痛むからもう少し休んでから動くぜ」

そう言って魔理沙は縁側に横になる。うん、流石にやりすぎたわ。

「あはは……ごめん。やりすぎた」

「別に良いって。私から仕掛けた事だしさ。それより早く行った方が良いんじゃないか？ 他の命に関わるような事だっとならさ」

「それもそうね……それじゃあ行くとしましょうか霊夢」

「解ったわ。魔理沙も早く治して来なさいよ」

「解ってるぜ。それまで楽しみは残しておいてくれよ？」

「はいはい」

『靈夢はそう言って空を飛ぶ。私もそれに続いて空を飛び、『紅魔館』へと飛び立つ。』

彼女達は私を憎んでいる。だからこの異変を起こした。

それが本当かは解らない。これは結局憶測でしかないのだから。

だからこそ私は飛び立つ。何故この異変を起こしたのかを探る為に。

例えばどんな理由であれど話し合いでは解決しないだろう。

だったら戦うだけだ。そして薙ぎ倒すだけだ。

ただ、それだけだ。

私と靈夢は気持ちを引き締め、『紅魔館』へと飛び立つた…

## 紅霧異変、始動（後書き）

・デファイ・スカーレット

レミリアとフランの母親にあたる吸血鬼。

一応、月姫のアルクエイドと同じ真祖って設定です。

彼女の能力である『ありとあらゆるものに逆らう程度の能力』についてはそのうち書く過去編にて説明します。

ちなみに名前の由来は「逆らう」という単語を英語にした際にでた「defy」を捻っただけです。安易だね…orz

## 生と闇（前書き）

すごい更新がゆっくりすぎる…  
こんな調子で大丈夫か？

## 生と闇

私の言う『生』とは、単に命の事を指すだけではなく、人生とか、生き様とか、そういうのを全てひっくるめて『生』というのだ。

人は生まれた時は真っ白な『生』を持ち合わせており、生きていく中で体験した出来事、関わった人々、あらゆる事に対する自らの行動、それらによって、『生』が白くなったり黒くなったりするのだ。つまり善人になったり、悪人になったりして事ね。

『生』が無くなる……つまり命が潰えた時、それを感じる事が出来る私に何とも言えない重みを感じさせるのだ。しかもそれを避ける事は出来ない。避けようと思っても勝手に確認し、私に伝達してくるのだ。

最初にこの能力が発現した時は、小さい範囲内の『生』の鼓動しか感じられなかったが、今では幻想郷の約半分以上の『生』を感じる事が出来るのだ。

何とか確認可能な範囲を縮めて『生』の鼓動をなるべく聞かないようににはしているけど……ハッキリ言って限界がある。抑え続けた所で結局抑え切れなかった範囲内じゃあ『生』の潰える感触は感じるワケだし、何よりこの状態だとマトモに戦い辛い。力尽くで自身を抑えてる様なものだしね。お陰で三割位の力しか出せないのよ……抑えた状態だと……あー……ホントメンド臭いわ……

でもまあ……これにも便利な所はある。

例えば『生』の鼓動を感じる事により、周囲に居る妖怪やら何やらを見つげ出す事が出来たり、怪我人の『生』の鼓動の弱り具合で、この後どう動けば良いのかも解るし……便利といえば便利なのよねえ……

…でもやっぱ面倒よコレ。解りたくも無い『生』の潰える感触を感じなきゃならないなんて……本当に面倒。

あー……どうにかならないかな〜これ…

「…ジナ」

「…ん？なに？どうかした霊夢？」

「…前見て飛びなさいよ……地味に弾幕とか飛んできてるのよ……」

「あ、本当。何時の間に」

「…アンタねえ……」

霊夢はハアッと深い溜め息を吐く。

「…何で溜め息吐くのよ」

「…こんな状況なのに、アンタはいつも通りマイペースだなんて思っただけよ」

「んー……そう？」

「ええ」

霊夢は涼しげな顔をして即答する。どうしてそんな早く答えられるんだろうね……昔っからだけど……良く解らないわ…

…まあそれは良いとして

「…まあ……こんな状況だし……マイペースになっても仕方ないよね」

「いや意味解らないわよ。もうちょっと解りやすく説明しなさいよ」

「…解り易くねえ……」

…とは言った言うけども……この状況を解り易く言えって言うのは……

…あ、難しくないわ。簡単に説明出来る。

えーと……うん。これね。

「如いて言うなら……」

私はそう言って剣を振るう。そこから放たれた三日月状の衝撃波が妖精に当たり、真っ二つに切り裂く。切り裂かれた妖精は空中で霧と化し、消えてしまう。これで何体目だ？百体目？それとも二百？

まあ……そんな事はどうでもいいんだけど。

私は剣をサツと払い、言葉を続ける。

「あまりにも雑魚が多すぎて退屈してるって事かな」

そう言って私は周囲を見渡す。

辺りには妖精の群れがビッシリと居る。話してる最中も潰してただけどなあ……一向に減る気配が見られ無いんだけど。ホント妖

精って無駄に多くて面倒だわぁ……………

さて。何故こうなったのかと言つと……………

私と霊夢は平常運転で飛行し、『魔法の森』へと向かっていた。

『紅魔館』は博麗神社からだとして、『魔法の森』上空を通過し、『霧の湖』を抜けて行かないとならない。故に私達は『魔法の森』へと向かっていたんだけど…

その途中で異様に気持ちが昂っている妖精共に遭遇したからさあ大変。いきなり弾幕を放つてきちゃうもんだから、私達も応戦せざるを得なくなつた訳で……………あ……………ホント、この時の妖精はメンド臭いわぁ……………だつてこいつら、異変が起きると場に影響されて力と凶暴性を増すのよ？危険だし、しかもいつもは群れないのに、この時に限って群れるし……………メンド臭い事この上ないのよ。別に退治したからと言つてお金が入る訳じゃないし。第一弱いし。もうホント妖精は私の中で三番目位に相手にしたくない種族なのよ……………因みに一番はスキマ妖怪。

…途中愚痴になつてたけど……………まあ兎に角そつという訳でこんな状況になつているのだ。

因みに今現在、私達は魔法の森の上空に来ている。弾幕で妖精を打ち落としつつここまで飛んで来たけど……………此处に来て更に妖精の数が増してきた気がするわ…

妖精つてのは、その数と凶暴性によって、その場所の危険度を示しているのよ。妖精が多くて、更には凶暴である場所には基本的に

は近付かずにさっさと引き返すのが得策なの。

でもこの習性は考えようによつては結構利用出来る。例えば異変が起きた際に、妖精共が群がっている場所に向かえば、異変を起こした首謀者に自ずとたどり着けるのよ。『吸血鬼異変』の際も、それを利用……てか、それに近づいたのが原因で異変に巻き込まれたのよね……あの時は自分自身の好奇心が恨めしいと思つたわ。

何でこんな所にこんなに妖精が溜まつてるのかは知らないけど……もしかしたら、この霧が発生した事をいい事に自分も異変を起こそうとしているのが居るのかもしれない。

もしそうなのだとしたら……物凄く面倒ね……もしかしたら遭遇するかもしれないし……

……まあ……遭遇したらしたで、さっさと退治させて貰うけど。

そんなこんなで妖精共をあしらつてる時に、突然霊夢が何かを見つけたかの様な顔をして止まる。

「どうかした霊夢？」

私は襲つて来る妖精を斬り払いつつ、霊夢に話しかける。

「あれ見て」

そう言つて霊夢は目の前の方に指を指す。  
するとそこには……

黒いワンピースを着た金髪の女の子が居た。しかも宙に。

…てかあれって…… 『ルーミア』 じゃない？ 何で下を向いて、まるで屍人みたいな雰囲気を漂わせているんだろ？

もしかして封印が解けた…？ いや、それは無い。封印は二年前にかなり強いのを掛けておいたから、ちよつとやそつとじゃ解けない筈よ…

…でも何か怪しいな… 試しに『生』の鼓動を試してみるか… あの封印が解けるとは思い辛いけど… もしもって事もある。鳥越し苦勞であつて欲しいけど…

さてと… どうかかなー… かなー… かなー…

…嘘でしょ

「あれって妖怪よね？ 何か様子がおかしいけど… 何かあったん」  
「霊夢！ 今すぐ逃げて！！ 早く！！！」  
「はあ？ 何で…！！」

霊夢は私の言葉の意味に逸早く気付き、その場から瞬時に離脱す

る。

すると、霊夢の居た場所は突然、巨大な闇に包まれた。

…恐れていた事態が発生しちゃったわね………よりにもよってこんな時に…

私は前方に居る『ルーミア』に目を向ける。先程見た時とは違い背中から黒い翼を生やしており、『ルーミア』の周囲には黒い球体の様な物が大量に浮かんでいる。完全に『封印』が解けてるわね…  
…誰よあれ解いたの。良い迷惑よ全く…

「…ジナ……あれってもしかして……いつぞや話してくれた妖怪？」  
「そうそう。あれが噂の『深闇より出でし者』…『ルーミア』よ」  
「あれが……『ルーミア』…」

霊夢は『ルーミア』の方に向き直り、いつもの如くダルそうな顔をして、『ルーミア』をじっと見つめる。そしてふくと興味の無さそうな声を上げる。相変わらずこの子は……物事に関する関心が無さすぎだよ…

全く………相手は二年前のあの『心内闇侵食異変』の首謀者なのに

………

『心内闇侵食異変』

それは突如幻想郷で生きる人間や妖怪などの者達の心に強大で下劣な『闇』が発生した異変。

『闇』に汚染された者達は強盗や殺戮などの下らない争いを起こし始めたのだ。

その異変の首謀者が『ルーミア』。彼女は自らの持つ『闇を操る程度の能力』を行使し、幻想郷を乗っ取るうとしていたのだ。

当初、この異変は幻想郷を創り上げた妖怪である『八雲紫』にすら解決不可能とまで言われていたのだが……たまたま『ルーミア』と遭遇した私を取り敢えず倒して、そのまま手頃な手拭いに生命力を大量に込めた封印を行ったのよね。あの時はかなりの大金が貰えたわ〜お陰で霊夢と魔理沙を二ヶ月は余裕で食べさせられたわ。いや、あれは運が良かったわ。あそこで遭遇出来たのは、多分日頃の行いが良かったお陰ね。

まあ運が良かったとは言っけど、結構面倒だったのよね。アイツ以外に強かったからさ……いやホント、能力が無かったら大変だったかも。

まあ問題なく倒したんだけどさ

暫く下を向いて黙り続けていたルーミアだったが、突如ふつと顔を上げてニカッと笑う。相変わらず気持ち悪い笑い方するわねアイ

ッ。

「久しぶりね……刃奈」

「あーはいはい久しぶり久しぶり。もう会う気も無かったけどね」

「あら酷い。私はあれからずくずくずくずと貴女の事を思い続けてたのに」

「何それ気持ち悪い。何よアンタ。歪んだ愛にでも目覚めたの？」

「愛……確かにそうかもしれないわね……この喉がつかえる様な感触……まさしく恋なのね」

「煩いわよ。それよりアンタ……封印はどうしたのよ？」

「ああそれ？それならたまたまそこら辺に居た雑魚妖精百体に無理矢理解かせたわ」

…それで解けちゃうの…？流石に甘かったかな……もうちょっと力を込めるべきだったかな…？

「フッフ 驚いた？」

「いや全然」

「むう……お世辞でも驚いたって言ったって良いじゃない……」

「いやそういうのいらぬから。てか求めないでよ」

「やくだ アナタを手に入れるまでは絶対止めない」

「…ハア」

こいつメンド臭い……二年前に遭遇した時はこんなじゃなくて、もっとカリスマに溢れてた筈なのに……封印のせいで色々と狂った？

…あー……それにしてもどうしようかな……このまま放置したら、自己主張の為に周りを襲い始めそうだし……けど今はそれ所じやないし……

…はあ……もうしょうがないわ…

「靈夢。先に紅魔館に行つててくれる？」

「え、ちよ、ちよつと待つてよ。私はその紅魔館が何処にあるか解らないのよ？無茶言わないでよ…」

「あ、それに関しては大丈夫。このまま森を抜けて湖を真つ直ぐ進んだら直ぐ着くから。だから安心して行つて」

「えー…」

靈夢は露骨に嫌そうな顔をして文句を垂れる。いや、お願いだから文句言わないで行つて？あれを早い所何とかしないといけないんだからさ。

「…ハア……解つたわよ。さつさと終わらせて来なさいよ？」

「解つてる解つてる。じゃあまた後でね」

「ええ……ホント早く来なさいよ」

靈夢は最後に釘を刺す様に言うと、湖の方へと飛んでいった。

…さてと……それじゃあさつさとあの狂った馬鹿を再度封印して、とつとと紅魔館に向かいますしょうか。

私は剣を鞘から抜き、構える。そしてルーミアに向かって叫ぶ。

「私は誰の物にもならないけど、私に勝てるって言うなら考えて上げて良いわよ！ルーミア！」

「！それ本当！？」

「ええ。但し！私が勝つたらアンタをまた封印させて貰うわよ。良

いわね！」

「ええ良いわ！受けて立とうじゃない！」

ルーミアは闇から巨大な大剣を取り出し、ブン！と一振りし、構える。

その時の顔はとても嬉しそうだった。

私達はお互いに剣を構え、

お互いに一歩前に出て、

お互いに口を開き、

お互いに言葉を交わす。

あの日も交わした……あの言葉を

「さあ……闇の力に吞まれ堕ちなさい！愛しき恐敵よ！」

「さあ……生の力に吞まれ消えなさい！討つべき強敵よ！」

フッと私とルーミアの姿が消え、次の瞬間、

私の刃とルーミアの刃が勢い良く重なり合った

生と闇（後書き）

・ルーミア

いわずもがな、EXルーミアでございます。

EXルーミア可愛いよEXルーミア

・『心内闇侵食異変』

ルーミアが起こした大規模な異変。

回想はやるかもしれないし、やらないかもしれない

相変わらずの遅筆でスマソ…

そしてまた遅くなるかもしれないです…orz

そんな訳なんで次回も気長に待っててくださあ…

霧深き湖の上にて（前書き）

相変わらずの遅筆。どうにかするべきだよね…うん…

## 霧深き湖の上にて

霊夢 side

魔法の森を抜けた先にある『霧の湖』。今私はその上空を飛んでいる。道中襲ってきた妖精達は適当にお札をバラまいて倒し、襲ってきた妖怪は大方蹴り飛ばして退治した。それ以外にこれと言った障害は無かったけど…しいて言うなら数が多くて面倒だったわ。

それにしても…ジナ大丈夫かしら…？いくら一度倒したことがあるとは言え、あの妖怪の賢者の八雲紫さえ苦戦するような相手に怪我を負わずに勝てるとは思えないわ…

相手が弾幕ごっこにに応じてくれれば話は別だけど…そんな雰囲気には見えなかった。何だか思考やら何やらも狂ってるみたいだったし…大丈夫かな…

…べ、別に心配してるワケじゃないんだからね！じ、ジナに死なれたら私や魔理沙の生活源が失われて大変なだけなんだからね！勘違いしないでよね！

…と、私は目を泳がせながら、なんだか落ち着かない様子でありながらも自分自身に言い聞かせるようにボソツと呟く。でも正直流石にこれは無かったかな…と軽く身悶えする

…あうー……何してんのよ私……周りに誰も居ないからってこれ  
は無いでしょ……あー！もう！は、恥かしいったらありやしないわ  
よー！うらー！……！！

ブンブンとお払い棒を振り回し、必死に恥かしさを取り除こうと  
する。正直この行動自体が恥かしさを増幅させるもののような気は  
するんだけど……何もしないよりかは精神的に落ち着くのよね。

そんなこんなで恥かしさを取り払おうとしている所に、また妖精  
が迫ってくる。

またか。私は軽く溜め息を吐き、お札を投げようとしたが、ふと  
その妖精の気配が今まで出て来た妖精のそれとは違うことに気が付  
く。アイツは一体…？

普通のとは何かが違う水色のワンピースを着た妖精は私の目の前  
で止まると、激昂してるかのような口ぶりで話しかけてくる。

「ちょっとあんた！勝手にアタイのナワバリに入ってくるなー！」

「…ナワバリ？それってどこの事よ」

「ここの湖に決まってるじゃない！そんなことも分かんないの？」

いやそんな事言われても困るんだけど……てか、湖が誰かの所有  
物だなんて聞いた事も無いわよ。

まあ…正直どっちでも良いんだけど。私には関係ないし。

「…で？入ったからどうなのよ」

私は退屈そうに欠伸をしながら尋ねる。

「え？そりゃあモチロン…えーと…どうしよう？」

いやそんな事聞かれても…私の知った事じゃないし…

…あ、そうだ。適当な事言つて通れば良いんじゃない？そうすれば面倒事を避けてさつさと『紅魔館』に向かえるし。よし、そうしよう。

目の前でうんぶん悩んでいる妖精に向かって私はコホンと咳払いをし、適当に考えた事を言う。

「私がさつさとここから消えれば良いだけの話でしょ？だったらア  
ンタがそこを退けてくれれば私はさつさとここから消えれば万事解  
決でしょ？」

「あ！そうか…あ、いや分かってたわよ？そうすれば良いこと  
くらい！」

アタイはあんたがそのことを思いつくりコーなヤツかどうか確かめ  
ただけよ！ホントだからね！」

「はいはい…」

目の前で焦っているこの馬鹿そうな妖精は放っておいて、とりあ  
えずさつさと先に進みましょう。ジナの命がかかっているんだから…

…とは言つても…この霧だと進むのにも『紅魔館』を見つけれ  
るにもかなり時間がかかりそうね…やれやれどうしたものやら…

「あ、そーいやあんたどこに行こうとしてんのよ。今は他の妖精達  
が暴れててアブないわよ？」

別にあんなのは危くないわよ…ジナの本気に比べたら……だってジナが本気で戦ったら私でさえ勝てないのよ？しかもかなり荒ぶってんのよ？アレに比べたら……全然危くないわ。

…って、何妖精の話し聞いてこんな事考えなきゃならないのよ…  
…そんな事してる場合じゃないのよ。さっさと『紅魔館』に向かわないと…

…あ、そうだ。確かこの妖精、ここを自分の縄張りだとか言ってたわね。それじゃあ『紅魔館』の事も知ってるかもしれないわ。試しに聞いてみましょう。

「…ねえ？この辺に真っ赤な館があると思うんだけど……アンタ知らない？」

「あーアレ？うん、知ってるよ。アタイあその門番と仲良しなんだ」

門番……あー何かジナに聞いた気がするわ。緑色とのチャイナ服を着て、『龍』の文字が書かれた帽子を被った赤髪の妖怪が門番をやってるって。名前は聞いてなかったから知らないらしいけど。

…それは良いとしても……ビンゴね。そこそが『紅魔館』。ジナを狙った吸血鬼の本拠地よ。

よし。そうと解ればこの妖精にその場所に案内して貰いましょう。自力で探すよりその方が早いわ。

「ねえ……えーと…」

「チルノよ！アタイの名前はチルノ！」

「そう…チルノね。私の名前は博麗霊夢。アンタに頼みたい事がある」

るんだけど…」

「ん？なに？もしかして今言つてたどこに連れてつて欲しいとか？」

「そういう事。お願い出来るかしら？」

「いいよ！アタイは心がとつても広いから！それくらいいいわよ！」

「ホント？それは有難いわ。早速おねご。ただし条件があるわ！」

…何よ」

チルノはふぶん、と何だか偉そうな態度で私にこんな事を言ってくる。

「弾幕ごっこでアタイに勝ったら案内したげる！勝てなかったら案内しないわ！」

…心が広いつて言っておきながらどうして突然弾幕ごっこを挑んでくるのかなあ……心が広いならそのまま案内してよ……全く…

…ハア……文句言っても仕方ないわね……しょうがない、相手して上げましょ。

「…解つたわ。相手をして上げるわよ」

「ふぶん！アタイの弾幕で凍らせて英吉利牛と一緒に冷凍保存して上げるわー！！」

「どんな台詞よ…まあ良いわ。かかって来なさい」

私はお札を取り出し、チルノと距離を離す。そして先手必勝とばかりにチルノが弾幕を放つたのを皮切りに、弾幕ごっこの火蓋が切つて落された…

魔理沙 side

やれやれ漸く体の調子が戻ったぜ。ちよつとばかり時間がかかったな……もうジナと霊夢は『紅魔館』に着いちゃったかな？ そうだとしたら……かなり不味いぜ。

もし先に吸血鬼を退治されたら、ジナを目の仇にしている吸血鬼を退治して今までのお礼とばかりにジナに恩返しをするという重大なプロジェクトが失敗しちゃうぜ！ そんな事になれば私の恩返しをするチャンスが無くなっちゃうぜ！

普通の恩返しじゃあジナに恩を返し切れないんだ……だから吸血鬼は私が退治するんだ！ 霊夢やジナには渡さないぜ！

私は箒をギュツと握り、一気に加速する。魔法の森をどこからか飛んでくる黒と白の弾幕を避けつつ進み、『霧の湖』の上空へと飛び出す。

ブワ！と顔にかかる霧と風圧に少し怯むも、すぐに体勢を立て直し、湖の上を進む。

しっかし本当に霧が濃いな……これじゃあ目的の場所もそうそう簡単には見つからないぜ。どうしてもんかな……

……うん？ あれは……

私がふと周囲を見渡すと、誰かが弾幕ごっこをしているのを発見した。霧のせいで姿がうつすらしているけど……アレは霊夢じゃないか？ 一体誰と弾幕ごっこしてるんだ？

私はその様子を良く見ようと弾幕ごっこをしている所に近付く。近付く度に視界が少しずつ良くなり、霊夢の姿をハッキリと捉えられるようになる。

そしてその瞬間に発動される、霊夢の相手のスペカ

凍符「パーフェクトフリーズ」

霊夢の相手……どうやら妖精みたいだが……何か馬鹿そうだなあ。……っと、そんな事言ってる場合じゃないぜ。発動したスペカは……何だあ？ピタッと止まって動かないぞ？一体どうなってんだ？

「……成る程ね。一度止めて相手が油断しきった所を再度動かし仕留める……そういうスペカってワケね」

「！？　ば、バレた！！？アタイ何も言っていないのに！」

「こんなの大体想像出来るわよ。だって止まるなんてあからさま過ぎるでしょ？」

霊夢はそう言って陰陽玉を取り出す。もしかしなくても投げられるつもりだけアイツ……あゝあーアイツ（妖精）終わったな……アレはジナや大妖怪クラス以外はそうそう簡単にやあ落とせないトンデモウエポンだけ。妖精じゃあどう考えても無理だろうなあ。

「……そろそろ動き出すかしら？それじゃあこれでラストよ。喰らいなさい！」

妖精の弾幕が動き出した瞬間、霊夢は陰陽玉を妖精に向かって投げつける。投げつけられた陰陽玉は弾幕の中をまるで弾幕が解つて

いるかのようにスルスルスリと避けていく。そして妖精との距離が徐々に縮まっていき、そして……陰陽玉は妖精の顔面に命中した。陰陽玉が当たった妖精は克蘭クランと頭を回し、ヒューっと湖に向かって落下していく。

私はすぐさま落ちていく妖精を超スピードで回収し、若干危なげではあったが、何の問題もなく箒の後ろに洗濯物のような体勢で乗せた。

やれやれ…相変わらずの威力だな……妖精が気絶しちゃってるよ……まあでもすぐに起きる気はするけどな。

落ちていった妖精を追ってきた霊夢はどうやら漸く私に気が付いたらしいが、特に何か表情を取るような様子もなく、いつも通りの素っ気無い表情で話しかけてくる。

「…あ、魔理沙じゃない。体の具合はどう？」

「お陰様でバツチリだぜ。所で霊夢。こいつ……誰だ？」

私はそう言って後ろにかけている妖精に目をやる。霊夢はハア…と溜め息を吐いた後、ダルそうな面持ちで口を開く。

「ええそうよ…そいつと弾幕ごっこして、勝ったら『紅魔館』まで案内して貰うつもりなんだけど……」

「…これじゃ案内のしようがないな……仕方ない。起きるまで待つとしようぜ！」

「そうね…もしかしたらジナが来るかもしれないし……」

「ジナ？あ、そういえばジナがいないけど……どうしたのか？」

「ちよつと野暮用よ。すぐ来ると思うから待つてましよう」

そう言いつつ、霊夢は下に下りていく。

あんまりジナの事は心配してないようだな……まあジナ強いからな。心配する必要はないし。

私はいかにも気だるそうな霊夢の後姿を見ながら、篝の後ろにかけた妖精が落ちないように気をつけながら湖の近くの木の近くに下りていった…

## 霧深き湖の上にて（後書き）

今回は主人公の出番0。なんとか投稿しようと焦った結果、主人公が居ないという不具合が生じてしまった…なんだかねえ…

### ・ツンデレイルム

この作品においては霊夢は出来るだけ可愛くしようと思います。  
このツンデレイルムはその先駆けです。  
早くデレデレイルムを出したいなあ…

### ・チルノの台詞

これはジナが既に紅魔館の存在を知ってしまったので、結構な変更が入っています。  
でも弾幕ごっこを始める時の台詞は最初と最後のちよつとを変えただけで、一応原作の台詞です。  
それにしても…英吉利牛って食べるのだろうか？

今回はジナ vs EXルーミアとなっております。  
また遅くなると思いますが、いつも通り気長にお待ち下さい。それでは

聖なる人（前書き）

今回は比較的早かったと思います。

それでも二週間以上経っていますがorz

## 聖なる人

刃奈 s i d e

赤く染まった空の下、重なり合う剣の音と、ぶつかり合う力の音だけが周囲に響き渡る。

ガキン！と音を立て、私とルーミアの剣が重なり合う度に私の心は潤っていく。

戦い…死闘…只の殺し合いに見えるこれは、心の中で常に戦いを求めていた私の心を大きく刺激する。

ああ…戦闘狂とは悲しいものよね。こんな命を懸けた意味の無い争いに快樂を見出しているのだから。

ああ…しかしそれが私。戦闘狂という悲しい性を持ちし私は、この争いに喜びを感じている。

感じてはいけないものだとは解ってはいる。だが私の心は、現に今喜んでしまっている。楽しんでしまっている。もうこうなってしまう以上、私は私自身のこの快樂を止める事は出来ない。そして誰も止める事は出来ない。

例えそれが

私の愛しの親友であったとしても。

ルーミアは剣を弾いて私から距離を取り、手に黒い球状の物体を

生成する。

ダークマター  
暗黒物質…彼女が得意とする闇の操作によって生み出された恐ろしい物質。これに触れてしまうと自らの中に存在する『闇』が呼び起こされ、その『闇』により自らを追い詰めてしまい、最終的には死んでしまうのだ。

『闇』は『生』の輝きを奪う。私の感じている『生』はルーミアの『闇』とは相反する存在。ルーミアはその『闇』によって全ての『生』を奪ってしまうのだ。

二年前のあの時もそうだった。ルーミアは『闇』を駆使し、幻想郷に住む者達を狂わせた後に、彼らの『生』を奪っていったのだ。

利用するだけ利用し、必要が無くなったら食料と化す。有意義に『生』を使つたわ。

でもそれは間違い…彼女は『生』をむやみやたらに奪っていっただけ。彼女は結局、自己満足の為に多くの『生』を脅かしたのよ。

別にそんな事はどうだっていいのだが、『生』を奪うという事は私に『生』が消えるあの感覚を憶えさせたという事。つまり私に危害を加えたって事。

そんな奴に……私が容赦する筈がない。

私は霊弾と魔弾を混ぜた弾を形成し、それらをルーミアに投げつけながら一気に接近する。

弾はルーミアの持つ十字架の様な剣に掻き消されるが、これは囹だったのだから問題ない。私はルーミアの懐に一瞬で潜り込み、彼女の腹を容赦なく斬りつける。

斬りつけられた彼女の傷口は、彼女の源である『闇』により速攻で治癒される。やっぱり一筋縄じゃ行かないわね…

私は傷口が治癒するのと同時にまたルーミアを斬りつける。そしてまた傷口は治る。

彼女の『闇』による治癒は確かに万能だ。普通ならどうしようもないだろう。だがそれにも弱点はある。

それは『闇』と相反する存在である『生』だ。『生』の強大であり、それでいて強い光を放つエネルギーが唯一ルーミアに傷をつけられる手段。ルーミアを『負』とするのなら、私は『正』。私とルーミアはある意味反対の存在なの。

前に『生』は白くなったり黒くなったりすると言ったと思う。けど、例えばどちらかに属しているからって『生』が『正』の物である事には変わらない。てかそうしてるんだけどね、私の力で。

いやまあ…『生』ってどれに対しても平等で中立であるんだけど……何も好き好んで『負』を取り入れる必要性ってないじゃない？ だって面倒なだけだもん…『負』の方の力って。

ま、兎も角私は『負』の方に傾くつもりはない。自分が楽しくない方なんて選ぶ必要なんてないしね。

私はルーミアを蹴り飛ばし、懐から一枚の紙を取り出す　　ス  
ペルカードだ。

私はそれを空高く掲げ、スペルカードに書かれた名を読み上げる。

生符「輪廻転生の導き」

初のスペルカード宣言。それはあまりにも軽いもので、でも何か

強い力を持っていて……そして何か……沸き立つものがある。

まあそれはいいとして。

スペルカードから出現した円形状の輪の形をした弾はルーミアに向かって放たれる。しかしルーミアはそれを余裕な表情で避けていく。

だがしかし、この弾幕の真骨頂はここからだ。

私は手を翳し、それを引くと、飛んでいった弾幕が曲がり戻ってくる。

ルーミアは戻ってきた事に驚きつつも問題なく避けている。

そこで私は弾幕の速度を上げてルーミアに再度弾幕を放つ。ルーミアは速くなった所為かだんだんかわし辛くなってきている様に見える。

私は弾幕を避けているその隙にルーミアの後ろに回りこみ、その背中に生えた黒い翼を細切れにする。そしてそのまま剣を持っている腕も真つ二つに切り裂く。

しかし血は出ず、只ドス黒い『闇』が周囲に散らばるだけ。散らばった『闇』はルーミアの体に集まり、彼女の体を癒す。

やっぱり只の剣じゃあ傷つけられないわね……ハア……仕方ない。もうちょっとやる気出しますか！

「ふ、フフ……この程度で私を倒せるなんて……思っ  
てないわよ」  
「！」

私は剣に付いた『闇』を払い、髪の毛を手で払い、キッとルーミアを睨む。

「アンタ…一年前にも言ったわよね……同じ台詞を。全く…芸が無いのよ芸が。もうちょっと学習しなさいよ」

私は溜め息混じりにそう言う。

ルーミアは今の発言で腹でも立てたのかプルプルと震えている。

ま、あんな事で腹を立てるようじゃあ私には勝てん

「ハア…ハア…辛辣な言葉で私を責めたてる……やっぱり貴女は私とあるべきなのよ！ハアハア…！」

…予想外ね……こいつ…予想外のド変態だったわ。こんなマトモに相手にしていたらこっちまで変態になっちゃうわ……とっとと終わらせてしまいましたよ。

私のスペルカード生符「輪廻転生の導き」の発動時間に限界が来る。私はルーミアから距離を取り、二枚目のスペルカードを発動する。

生命「ライフライン」

スペルカード発動宣言と共に出現する無数の光線。それは周囲一体を覆い尽し、まるで道のような形となる。

道の中にルーミア。彼女は光線の道に逃げ道を塞がれた。

そしてそこに撃ち出される大量の弾幕。



やならないのよ全く…

…ま、もう過ぎた事だしどうでも良いか。取り敢えず早い所『紅魔館』に向かわないとね……………！

私が動こうとした正にその時、私の真上から振り下ろされる巨大な剣の存在に気が付く。

私はそれを受け止めるが、いきなりの事だったんで力を入れ切れず地面に叩き落とされてしまった。

クツ…！まだ生きてたの…！あのド変態…！

「ハア…ハア…あ、危なかったわ…貴女を知っていなければもつとダメージは酷かったでしょうね…」

「私の事？ フン…私の何を知っているのよ…アンタ？」

若干小馬鹿のするようにルーミアに問いかける。ルーミアはそれにニヤリと笑って答える。

「ええ…良く知ってるわよ？貴女が『聖人』だって事をねえ！」

「！ な、何でそれを知ってるのよアンタ！二年前にアンタに話した覚えは無いわよツ…！」

「フフ ええ…話されてないわよ？だって…私がそこいらの妖怪や妖精を脅して手に入れた情報だもの」

「…ああもう…面倒ねホント…」

『聖人』

それは生まれながらにして神の力の一端を宿した人間。見た目は通常の人間と何ら変わりがないが、聖痕とかいうのを解放する事によって怪力や高速運動や特異な反射神経・耐久力等々、一時的ではあるけど人間を超えた身体能力を身につける事が出来る。

只、これはあまりにも莫大過ぎる為、制御を誤まると過負荷がかかるなど容易に使用できる力ではないらしく、しかも安定化させつつ力を引き出す精密作業を必要とするのよ。要は負担が物凄いつてワケ。常時出し続けるのは到底無理な話だそうだ。

まあ…私には関係ないけど。

だって体にかかる代償は私の「生」を司る程度の能力で代償となる『生命力』を生み出しまくれば関係ないでしょ。実際それで何とかなってるし。

他の奴がどうなのかは知らないわよ。だって私以外にこの幻想郷に『聖人』は存在しないし。だからどうやっても比べようがない。文句ある？

あ、そうそう。ついでに言うと、『聖人』って『神の子』ってのの弱点も引き継がれてるらしいわ。それが何なのかはアイツ……『八雲紫』は教えてくれなかったけど。

二年前：ルーミアを退治した後、私は初めて『八雲紫』と遭遇した。

最初に彼女に会った時は、正直…恐怖というのは感じなかった。『八雲紫』は妖怪だ。それも幻想郷を創造した……妖怪の賢者。

そんな奴に遭遇すれば、忽ち体は震え上がり、動く事なんて出来なくなるだろう。

でも私は違った。

私はアイツに一発かます余裕があったのだ。まあ全然効いてなかったけど。

そいつは言った。私は『聖人』だと。私は生まれた時から無意識に使用していると。だから初めて『聖人』の力を使った時に何の狂いも暴走も無く安定させて力を使えたんだそうだ。

何でそんな事を知っているのか？私はすぐに問いかけた。

八雲紫は言った。自分は私がいつも見る夢の正体を知っていると。私が何故、『聖人』として生まれてきたのかも知っている。

私は勿論問い詰めた。夢の正体・『聖人』として生まれた理由・そして何故、その事を知っているのかを。

しかしアイツはその事を話さなかった。アイツは時が来れば話すと言い、何処かへ消えてしまった。

時…それが何時かは解らない。もしかしたら一ヶ月後かもしれないし、一年後かもしれない…もしかしたら十年後……それまで待ってのは、正直メンド臭い。さっさと話して欲しいものだけ……アイツはそれを良しとは思わないらしい。かなり面倒ではあるけど……アイツが自ら話してくれるのを待つしかないってワケ。ハア……メンドくさ…

それにしても……<sup>ルミア</sup>こんなのにそれを知られるなんてね……ハア……面倒な事この上無いわ……

「……で？それを知ったからって何なのよ。それで何か変わるワケ？」

私はいかにもダルそうに問いかける

「ええ……とつても変わるわ だって私は……『神の子』の弱点を知ってるんだもの」

そう言つてルミアは剣を先端を私に向けるように構え直す。

何してんのアイツ……一体何を狙つて……

……まさか……私を刺し殺すつもり！？

「気付いたようねえ！そう！私は貴女を刺し殺す！それが『神の子』の弱点だからね……！」

「……殺したら……私はアンタのモンにはならないわよ！解つてんの！？」

「ええ解っているわよ？私はね……貴女を殺し！そしてその闇を喰らつて一心同体になるの！どお？素晴らしいでしょ……！」

……何よそれ……あまりにも……あまりにも……！

「下らなさ過ぎよ！アンタのその下劣な思考は！聞いててウンザリするわッ！！」

「…下らない？下劣？ウンザリ？…そうよね……やっぱり理解されないわよね…」

…もう良いわ。貴女…早く私に取り込まれなさいッ！！」

ルーミアはその黒い翼を羽ばたかせ、私に向かって一直線に急降下してくる。

私も避けようとはするが…生憎ルーミアお手製の『闇』に阻まれて動きが取れない。どうしてもものかしらねえ…

…ん？小石…小石…か…

…フフ これなら何の問題も無いわ

私は小石を掴み、『生命』を与えルーミアの真下辺りに置いておく。

これで…片がつく

「さあ！死になさいッ！……」

「ハッ……死ぬワケ……無いでしょ！……」



「…で？何で無事なワケ？」

「え？それは勿論、周囲の闇に同化して直撃を免れたからに決まってるじゃないの〜 私だって成長しているのよ？」

「はいはい…」

…それなりに力籠めて放った一撃だったんだけどな〜……こっちはアツサリと生き残られると…何か癪ね。

…まあ良いわ。それもこれもこいつを封印すれば全てお終い。漸く『紅魔館』へと向かえるワケだ。

さーて！それじゃあさっさとこいつを封印して……………

…アレ？居ない…？一体何処に行ったの？

私は周囲をキョロキョロと見渡す。しかしそこで、頭上に『闇』に染まった『生』を察知する。

…まさか……………！

私は咄嗟に上空の方に目をやる。

するとそこには……………私を見下ろし、ニヤニヤと笑っているルーミアがいた。

アイツ……何時の間に？

「フッフ 今回は負けたけど、次は絶対負けられないわ！次こそ勝って貴女を私の物にして上げる！首を洗って待ってなさい！」

「あ、ちよ、ま……」

私は静止をかけたようにしたが間に合わず、ルーミアは何処かへと飛んで行ってしまった……

……何か……もうどうでも良いわ……取り敢えず『紅魔館』に行きましょう……

私は精神的にドツと疲れた体に鞭を打ち、『紅魔館』に向かって飛び出した……

## 聖なる人（後書き）

・ジナの『聖人』としての力

これはとある魔術の禁書目録を参照しています。  
ちなみにとあるだと不可能に近い？ですが、  
ジナは生命力を生み出し、それを犠牲にすることで問題なく維持できてます。そういうものなんです。

疑問は受け付けます

・小石が木に

これはジョジョの奇妙な冒険の第五部の主人公のジョルノ・ジョバーナのスタンド、ゴールド・エクスペリエンスの能力です。  
アレとは違い、成長させたものに攻撃を加えると自分に返ってくるという事はありません。  
ただし、G・Eよりも早く成長させる事はできません。

こんな感じかな…とりあえず、次回もゆっくりしていって殴  
…ゆっくりお待ち下さい。それでは

## 紅の館と紅の門番（前書き）

ようやく更新の聖生伝。相変わらずの遅筆で申し訳御座いません…  
それなのに上達はしてません。

何だかなあ…orz

## 紅の館と紅の門番

刃奈 side

予定外の所で時間を食っちゃったわね……さつさと行かないとあの吸血鬼姉妹と霊夢と魔理沙がぶつかっちゃうわ。

只でさえ面倒なのに、今は復讐で躍起になってるから余計面倒な感じになっちゃってるし……さつさと行ってさつさと倒さないとね。

他の『生』や霊夢・魔理沙に被害が出る前にね……

私は飛行スピードを上げ、『紅魔館』に向かって飛んでいく。途中、ポロポロな状態でくやしがつている水色のワンピースを着た妖精が居たけど……まあ例の如く無視。妖精一匹泣いてた所で私には関係ないしね。

そんなこんなで飛んでいる内に見覚えのある真つ赤な館が目に入る。漸く見えたわ……『紅魔館』

二週間前に行ったばっかだけど……まさかまた来る事になるなんて思っても見なかったわ。

さてと……前と変わってないだろうから……門の前には私の三人目の友人が居る筈……アレは妙に強い……もし霊夢と魔理沙が先に到達していたのならば、若干苦戦する筈だ。スペルカードルールを無視されたら苦戦どころじゃ済まなくなるけど……

……まあいざとなったらスペカ使って乗り切るだろうから大丈夫でしょ。だってあの子達強いし。

さてと……門の様子h「夢想封印!」「ギャー!」……どうやら終わ

った所だったようね… タイミングが良いんだか悪いんだか…

私は門から三丈程離れた位置に降り立ち、『紅魔館』の門まで走って行く。離れて降りた理由は特に無い。

私が到着した時には霊夢と魔理沙が倒れている緑色のチャイナ服を着た赤髪の女性を尻目に話していた。貴方達…悠長ねえ……まあ良いか。

「おーい！二人共ー！」

私は大きな声で二人を呼ぶ。二人はそれに気付いたのか、私の方を振り返り近付いてきた。

「遅いわよジナ。あまりにも遅かったから、とっとと門番をやっつけちゃったわよ」

「いや何それなりに大変だったモンでね……てか倒したんだ。スペルカードルールで？」

「？ そりゃ勿論そうでしょ？そういう取り決めになったんだから」

霊夢は不思議そうな顔をしながら返答する。

まあ不思議に思うわよね。わざわざ解りきっている事を聞かれたんだから。

…ははは……それにしても美鈴は手加減したのね……流石にルールもあつたから力を完全に出すのは不味いつて解つてただろうから……ははは…美鈴も大変ねえ…

「なあジナももう門番倒しちまったから中に入ろうぜ」

「そうね。さつさと入ってとっとと親玉を叩いてしまいましょ。ほら行きましょジナ」

「あー…うん…そうだね…」

私は少しだけ曖昧な返事をする。

だって…美鈴に目でこっちに訴えてきてるのよ…残れって…  
彼女も私の親友だから無下には出来ないし…ねえ…

…しょうがない…先に二人を入らせて図書館の引きこもりと何処か抜けてる瀟洒なメイド長と戦わせますか。彼女達を倒せなきゃ、どの道吸血鬼姉妹との戦いで生き残れないしね。

私はコホンと咳払いをし、二人に向かって口を開く。

「あー…私、ちよつとスペカの確認してから入るから、二人共先に  
行っでてくれる？」

「えー…また先行すんの…？そんなの飛びながらも良いじゃない  
の…」

「落ち着かないでしょそれ……兎に角、私は此処でスペカの確認し  
たら直ぐに行くから…ね？」

私の言葉に霊夢は呆れた表情、魔理沙は笑顔で返事をする。

「しょうがないわね…早く来なさいよ？」

「んじゃあ先に行ってるぜ！早く来ないと私が異変解決しちゃうか  
らな！」

「はいはい…じゃ、頑張つてね」

二人は各々にまた返事をする、館の中に入っていった。

…さてと…

「…一体何の用よ… 美鈴」

私が彼女…… 『紅美鈴』<sup>ホンメイリン</sup>の名前を呼ぶと、彼女は起き上がり、パンパンと服に付いた土埃を払うと、飛んでいったらしい龍の字が入った帽子を拾い上げて被り、私の方を向いて口を開いた。

「いや〜こうして話すのも久しぶりね、ジナ」

「そうね。会ったのは二週間前だったけど、話すのは三年振りになるわね」

「随分と長く話してなかったのね〜…やっぱこんな人通りの無い様な所で働いてると話す機会もなくなるわね」

美鈴は腕をグツと伸ばして軽く欠伸をしながら、昔を懐かしむ様に話す。

確かにそうだ。彼女がこの『紅魔館』で働くようになってからはマトモに話す事さえなくなっていた。

文通はしてたけど、数は少数で、基本的に重要そうな情報を交換する程度でしか行っていなかった。

まあ…お互いにメンド臭いって思ってたからなんだけど…

私と美鈴は私が十二の頃からの親友だ。彼女は私が能力を発言して間もない頃、戦い方を知らない私に戦闘指南をしてくれた、師匠みたいな存在。でも私が二年で美鈴と実力が同じになってしまったから、正直遊び方を教えてくれた友達みたいな感じだ。

彼女との出会いは、私が妖怪に襲われて、その頃まだ制御出来ていなかった私の能力が暴走し、襲ってきた妖怪だけでなく、他の『

生』さえも奪いそうになった時があった。

そんな時に彼女が現れて、私のあらゆる『気』を操って抑えてくれて、能力の暴走を止めてくれた。

何だかんだで面倒見も良かった彼女は、私の力を制御する方法を伝授してくれた。

それ以来彼女とは親友関係を築いており、霊夢や魔理沙に次いで親友なのだ。因みに初めてマトモに話した妖怪でもあったりする。彼女は妖怪の中でも大妖怪の部類の一人一種族の妖怪だ。故に彼女には共通する仲間というのが居ない。寂しいように見えるが、彼女の人柄の良さと彼女の持つ能力のお陰で、人間・妖怪果てのは神に至るまで親しく出来る為、そこまで寂しくはない。

それが本当か？と聞かれれば、勿論と答えられる。何故なら私は彼女と二年もの間交友を深めていたのだ。彼女の事は誰よりも知っている自信がある。だから私は彼女のそれについてイエスと言えるのだ。

そんな彼女の能力は『気を扱う程度の能力』。この世に存在する全ての『気』を扱う：まあ要は操ることが出来るのだ。霊気や妖気などの力に関係するものや、正気や狂気などの精神的なもの、冷気や熱気などの自然的なもの等々、『気』であるならば何でも操れるらしい。

らしい、というのは、彼女の能力の全貌を見たことが無いから。彼女の能力は神気さえも操れる恐ろしい能力なのだが、彼女自身が自身の能力の事を完全に把握し切れている訳ではないから、能力の全てを話す事が出来ないのだ。

しかし確証のあるものはある……それは彼女の能力は常に進化し続けている事だ、

元々鍛錬とか特訓とか、自身を磨く事が好きだった彼女は、毎日自身の能力と向かい合い、その能力について日夜研究に励んでいた。

そんな事を続けているうちに、彼女は自身の能力が『毎日』進化を続けていることに気が付いたのだ。

進化するのが普通だと思っ者は多いだろう。だが問題は『毎日』という所なのだ。

通常、能力というのは確かに進化をする物なのだが、それは簡単に出来るものではない。普通は使っているうちにいきなりクツと来るものだが、しかし彼女の能力はそうではない。彼女の能力は日々進歩しているのだ。

炎を扱う能力という一つの能力があつたとする。それは最初のうちは半径一丈（現在で言うところ約3m）程度でしか炎を周囲に発現させる事が出来なかつた。しかし次の日には一丈一分（現在で言うところ約3mと0.03m）まで発現が可能になっていた。と言うような感じだ。

成長は微々たる物であるが、しかし塵も積もれば山となるとは良く言ったもので、それを一年も続けていけば…炎の例で言えば、約三丈三尺（現在で言うところ約3m90cm）。でも面倒だから約4m位で考えて欲しい）まで伸びるのだ。

因みにこれは『何もしていない』ならばの話だ。もし、炎の能力を持つ能力者が毎日鍛錬を積んだとしたら…一年で三丈（現在で言うところ約9m）にまで成長させる事が出来るのだ。

彼女は妖怪でありながら変化を求める存在。生まれてこの方鍛錬を止めた事は無い。しかも彼女は人間では無く妖怪であるから、肉体的にも精神的にも限界が人間よりも遥かに高い。

つまり彼女は、毎年毎年弱小妖怪が名のある大妖怪へと変貌する程の力をつけ続けているのだ。

故に彼女は恐ろしく強い。あの妖怪の賢者である『八雲紫』さえも唸らせた程だ。

因みに…さつき彼女と同じ実力になつたと言つたが、それは当時

の時であつて、今私が美鈴と戦えと言われたら、確実に負ける自信がある。

確かに私も毎日イカレた鍛錬を続けているが、毎日成長を遂げる彼女には敵わない。私が幾ら『聖人』だとは言え、中身は所詮人間なのだ。人外染みていても、結局の所無理なものは無理なのである。故に彼女と戦うのは極力避けたい。マトモに手加減出来る自信が全く無いからだ。下手をすれば……どちらかの命が失いかねないのだ……そんなのはゴメン。だから美鈴と戦いたくないのよ……

しかし……戦闘狂としての私は戦う事を望んでいる。彼女と戦い、血を浴びながら、狂ったように戦いたいと願っているのだ。

ハア……親友とまで血みどろになりながら戦いたいとかフザけてるわね……どうして私って……こんなに戦闘好きなのだろう……？

……やっぱり……あの夢が関係しているのかな……？戦闘狂として、戦つて満たされた時、私はいつもよりも鮮明にその夢を見た……無関係とは思えないわ……

……と、話がズレた。まあ要はそんな感じで、美鈴は私の親友なのだ。

「いやいや……それにしても……見ない間に大人になつたね……！三年前とは比べ物にならない位綺麗になつてるじゃない！」

「美鈴だつて綺麗よ？容姿、性格、そして胸……どこを取つても完璧じゃない」

「あっははははは！そんな事ないっ……！でもちよつと嬉しいかな……！あっはっは！」

……やっぱり変わらないな……美鈴は……

彼女はいつも私と話す時は良く笑っていた…笑う角には福来る。そんな諺を信じてたのかは知らないけど、彼女は常に笑っていた。私が落ち込んでいた時に、彼女は笑いながら私に話しかけて来た事があった。私は最初は落ち込んで返事すら出来なかったんだけど、その笑顔を見ている内にこっちも笑顔になって、気が付いたら暗い気分も吹き飛んでいた。それは能力を使って行われた物ではない。彼女が普段からしている事なのだ。

そんな事は普通は出来ないだろう…私ですら、そんな事は出来ないと思う。

でも彼女はそれを平然とやってのけるのだ。ホント凄いなと思うわ…私も見習いたいものねえ…

「…所で美鈴。呼び止めたのは…タダペちゃくちゃ話すだけにした訳じゃないでしょ？」

「ええそうよ。私が貴女を呼び止めたのは、貴女の力を試してみたかったからよ」

「…私の？…先に進む為に力を測るつもり？」

「まあそんなとこね。いやあ…三年も会ってなかったから気になって気になって…」

…気になるって言われてもねえ…具体的にどうするつもりなんだか……てか、なるべく戦いたくないんだけどなあ…他にも色々やることはあるしね

「…で？どうやって測るの？」

でも気になってやっっちゃう自分がいる…ああ…戦闘の事になる

と体が勝手に動いちゃうわ…

「そんなに難しい事じゃないわ。タダ私を転倒させればいいだけよ」

「転倒？ …もしかして一撃？」

「お、良く解ってるじゃない」

美鈴はとても楽しそうに笑っている。

…何となく予想はしていた……転倒なんて軽いレベルでの測定なら、何か重い制約が付く筈だと…

「よっし！そうと決まれば早速やりましょう！貴女にも時間が無いだろうからね」

「じゃあさつさと通してくれてもいいんじゃないの？」

「それは私が許さないわ！あのカリスマ微妙なチビ吸血鬼の命令とかそういうの抜きにしてね！」

「…命令無視？良いのそれ？」

「まあ良くはないわよ？でもあんな弱つちい吸血鬼に従うのも何か癪なのよね。デフィなら別に良かったんだけど。だからジナがこの異変を解決してくれたら、私は紅魔館から出てこうと思うの。何だかあまり合わないしね…」

…傍迷惑な話ね……勝手に入って勝手に抜けようとするとか…美鈴ってこういう所大雑把っていうか…自分勝手っていうか…自由過ぎるっていうか…何と云うか…

「ま、そんな事はどうでも良いでしょ！それよりさつさと始めましょ？あまり時間も掛けてられないしね」

そう言うと、美鈴は静かに深呼吸を始め、自らの体の気を練りこ

んでいく。練りに練りこんだ気はやがて巨大になり、そしてそれは強大になる。

まだまだ本気ではないようだが、正直これだけでもかなりビクビクと震えてくる。見えてないけど、自分の顔が笑っているのが良く解る。

そう…今私は…とてもワクワクしているのだ…

「…んー…こんなもんかな？」

美鈴は気の練りを止め、その気を周囲に均等に纏わせる。

しかし、私的には正直物足りない。もっと強くしても良い位だ。

「その程度なの？もっと上げてくれても良いのに…」

私は残念そうに、しかし楽しそうに笑う

「いやいやいや…力を出しすぎたら不味いでしょ？後々戦えなくなつたらどうするのよ…」

「…それは嫌ね。敵を目前にして戦闘不能とか…つまらなさ過ぎるもんね」

私は不敵に笑う。正直、自分でもこの発言は色々とアレだと思つても止められないのよ…口が勝手に動いてしょうがないのよ…！

「…変わんないわね…その戦闘狂な所。前より悪化したんじゃないの？」

「…そう見える？」

「うん。すつごく見える」

「…嘘お…」

「どうやら、気が付かぬ内に笑顔が更に狂気染みたまものになっていたらしい。美鈴が若干戸惑ってたしね…」

「…不味いなあ…このままだと、私精神まで狂気に冒されちゃうんじゃないかしら？それは流石に嫌なんだけど…」

「まあでも…ジナは精神が強いから大丈夫でしょ」

「人の心を読まないでよ。でもねえ…本当に大丈夫だなんて保障は何処にも無いじゃない？」

「あはは そんなに弱気にならないの！気持ちしっかり持っておけば大丈夫大丈夫」

「…本当だろうか？うーむ……………」

「…うーん…まあでも、美鈴が大丈夫って言うなら大丈夫でしょ。今までもそう言っただ大丈夫じゃなかった事なんて無かったし」

「さてと！それじゃあやりますか！さあジナ…どこから…って訳には行かないけど…まあ兎に角！私に三年という月日で得た成果を見せてみなさい！」

美鈴はその場で仁王立ちし、完全に受身の態勢になる。

「良いわ美鈴…貴女に私の力を見せて上げるわ…三年間で生み出したこの技でね！！」

「行くわよ……………美鈴…！」

私は剣を抜き、上段に構えて呼吸を整える。そして剣に能力を行使し、剣は鮮やかな緑色へと変貌する。

私はそれを腰へと下ろし、そして一気に走り出し、美鈴に向かって私の奥義を放つ。

その奥義の名は…！

「生者…必！衰！」

私の剣と美鈴の気の壁がぶつかり合い、ズドオオオオオオン！！と辺りに巨大な音が鳴り響く。

私の剣は美鈴の気の壁を突破する事が出来ず、そのまま停滞している。

だが…この奥義の真髄はここからだ。

私の剣の光が強くなり、何と気の壁に徐々にヒビが入り始めたのだ。

「な！？これは一体…！？」

流石の美鈴も私の奥義に驚いているようだ。

そうこうしている間に、気の壁のヒビが更に悪化しだし、私の剣が気の壁のひび割れた部分から侵入を始める。

美鈴は気の強化を図ろうとするが、力が入らず、右膝を崩してしまふ。その瞬間、私の剣は気の壁の内部へと侵入し、美鈴に向かって振り下ろされた。

しかしそこで美鈴は、機転を利かせてそのまま崩れた右膝の方へと倒れこむ。それにより県の直撃から免れ、無傷だったのだが…

「…やれやれ…ジナの成長っぷりにはホント驚かされるわ…いたた…」

彼女は地面へと勢いよく倒れてしまい、そのまま両手を広げてバタン！と横たわってしまう。

そう…これつまり…

「…OKよジナ。合格よ」

そういう事である。

ハア…この奥義が通じて良かった…もし通用しなかったら対抗手段がなくなってたわよ…割と冗談抜きで

「はあ…それにしても今の技なに？体の力が奪われたわよ？」

「ああアレはね…相手のあらゆる『生』を奪って、それを剣の力へと変えていたのよ」

「『生』を…力に…？ たった三年で面白い技を身につけたわね…」

「たった三年とはいえ、力をつけるには充分だったわ。因みに今の以外にも他に数種程技を編み出したわよ？」

「ははは…凄いわねホント…流石は聖人と言った所かな？」

別に聖人は関係ないんだけどね…まあ良いわ。

「ふふ…取り敢えず、試験は合格したから通させて貰うわよ？」

「ええ良いわ。どんどん通ってって頂戴」

立ち上がって、服に付いた土埃を払いながら返事をする

私はそんな美鈴を尻目に紅魔館へと入ろうとする。

「あ、一つ忠告しておくわ」

「？ 何よ？」

美鈴に呼び止められ、振り返って返事をした時、美鈴の顔はとても真剣なものだった

「…スカーレット姉妹は怒りで我を忘れてるわ…半分位理性が残ってるけどようだけど…このままじゃ…あの姉妹怒りに吞まれて壊れちゃうわ」

「…」

一呼吸置いて、また口を開く

「…あの二人を助けて上げて…今のジナなら…絶対出来る…  
…お願い…ジナ…」

美鈴は頭を下げてください。先程はあんな憎まれ口を吐いたが、本当に嫌いという訳では無いのだろう…

美鈴は心の底からスカーレット姉妹を救って欲しいと思っている…それで何かメリットがある訳ではない…でも彼女は…そんな事

は関係なしに、タダ二人を救いたいと思って……私にお願いしている……

彼女自身が行けば良いのかもしれない……でも美鈴には解っていたのだ……真に二人の心に光を灯せるのは私しか居ないと……

「……安心して美鈴。必ず助け出してくるから。だから貴女はそこでボーっとしてて」

「ボーって……私はこれでも勤務態度真面目なだけど？」

「これから辞める癖に真面目ってのもどうなんでしょうねえ？」

「う……それは……まあ……最後まで真面目にやった方が清しいから……」

……そんなに困らなくても……全く……変な所真面目なんだから……

「はいはい……私が悪かったわよ……だからそんなに困らないでくれな  
い？」

「こー！困ってなんかいないわよ！ちょっと悩んでただけ！」

「それを困るって言うんじゃないのかしらねえ……？」

……まあ良いわ。取り敢えず行って来るから……しっかり門を守ってな  
さいよ？」

「まっかせなさい！ジナもちゃんと役目果たしてきてよ？」

「勿論」

私は紅魔館の扉に手をかける

「それじゃあ……行って来るから」

「……気をつけて」

美鈴の言葉を受けながら、私は紅魔館の中へと入っていった……



## 紅の館と紅の門番（後書き）

### ・美鈴の設定

これは完全にオリジナルのものとなっております。色々と書いてみて、試行錯誤した結果、チート能力者として名を馳せる事になりました。何故だ。

ちなみに美鈴は精神的な気の操作はあまり得意としてません。基本的に、相手を落ち着かせるときは話術でなんとかします。変な所やり手だなオイ

### ・生者必衰

ジナの奥義の一つ。スペルカードではなく、ガチの戦闘の時にのみ使用するかなり鬼畜な技です。詳細は本文参照

次回の更新は、何時になるか相変わらず不明。  
気長に待っていただけたら幸いです

魔女と聖人と地下図書館（前書き）

もう言い訳出来ません。遅くなって本当に申し訳ございませんでしたorz

## 魔女と聖人と地下図書館

刃奈 side

さてさて…漸く紅魔館に入れた訳だけど……妖精メイドが侵入者を倒そうと襲って来るものだから面倒ったりやありやしないわ…  
霊夢と魔理沙が先行したのなら、こいつらもやられてる筈なんだけど……もしかして…吸血鬼異変の時より人数増やした？てかこれ絶対増やしたわよね？だつて一片に襲って来る数があの時よりも多いもの。

…全く……面倒だから止めて欲しいんだけどねえ……所詮、妖精が幾ら集まろうと雑魚である事には変わりないんだし。てか、妖精以外の種族雇いなさいよ。妖精じゃあまともに仕事も出来ないし、第一弱いじゃない。そんなの雇つたつて無駄なだけでしょうに…

まあ……食事面とかには困らなさそうだけどね。

さて、今私は紅魔館地下図書館へと向かっている。恐らく霊夢か魔理沙のどちらかが紫もやし……七曜を操る魔女である『パチュリ・ノーレッジ』と戦っている筈だから、そこで合流しようというワケ。

どつちが戦つてるでしょうねえ……私の予想としては魔理沙が戦っていると思うんだけど……ほら、同じ魔法を扱う者だし。

まあ……どつちが戦っていたとしても、パチュリーはかなり強いから苦戦を強いられるのは確実だろう……まあ私は二人が勝つと思つてるけどね。

テクテクと歩くこと数分後、私は図書館の扉の前に到着した。相

変わらず重そうな扉であるが、実際中身はスツカス力なため、そんなに重くなかったりする。

そんな見掛け倒しな扉をゆっくりと開ける。中は館の大きさよりも広く、奥行きから天井の高さに至るまで、何もかもが高いのだ。それも館を突き抜けているのでは？と勘違いさせそうになる位に…

この図書館がこんなにも広いのは、この館でメイド長を務める『十六夜咲夜』の能力によるものであって、実際はそんなに広くなかったりする。

しかし、この図書館内にある膨大な書物を収める為には大量の本棚が必要になるため、元の広さでは全く収まりきらず、部屋内の空間を広げない事には収まりきらないのだ。

よくもまあそんな大量の本と有能な人材を集めたものだ。これだけの本を集めるとなるとかなりの時間と労力がかかるし、メント臭い。有能な人材…つまり所、美鈴や咲夜、パチュリーの事であるが、彼女達の能力と実力は尋常ではない。

美鈴は説明不要、咲夜は時間を止めたり一時的に遅くしたり出来、仕事も卒なくこなし、パチュリーは精霊魔法を得意としているが、全ての魔術関連に精通しているという優秀さ。こんなにも優れた人材を集める事が出来たつてのは本当に凄い事だと思う。

これもデフィの持っていたカリスマによるものなのかしらね……まあ正直どうでもいいんだけども。

さて…取り敢えずはパチュリーでも探しましょうか。あの霧を作ったのは恐らくパチュリーだろうから、あの霧に含まれている成分やら何やらも知っているはずだ。

もし、含まれている成分が他の生物にとってかなり有毒なもので、『生』をいとも簡単に奪えるようなものであるならば……私はパチュリーをふん縛ってでも強制的に止めさせることになるだろう。てか、だろつとかそういう仮定的な感じでなく、絶対に止めるわよ。

あの感覚を味わうのはゴメンだからね。

…あれ？何か目的が変わってるような……あれ？あれ？

…ま、いつか。

まあ取り敢えず気を取り直して…パチュリーは何処にいるのかしらつと……ん？誰か倒れてる？しかも見たことありそう……てかあるわね。どう考えてもある。けど何で倒れているのかしら？

…起こして聞いてみるか

私は床に倒れていた赤髪で真つ黒な羽の生えた司書服姿の女性を起こす。彼女の姿勢は勢い良く倒れたかのように服や髪が乱れており、よくよく見てみると、後頭部の辺りに小さくタンコブが出来ていた。

私は生命力を上げて自然治癒させ、顔を軽くはたいてその女性を起こす。てか、私コイツ知ってるけどね。

コイツの名前は存在せず、愛称なのか種族なのか解らないけど、『小悪魔』と呼ばれている。

コイツは此処の図書館の主であるパチュリーの使い魔で、言うなれば雑用だ。体の弱いパチュリーの代わりに本を整理したり、実験道具の後片付けをしたり、紅茶を出したりなどをしていたりしている。

一応、コイツは愛称にあるように悪魔であるのだが、どうやらかなり下位の悪魔で、かなりの臆病者だ。

実際、私が初めて此処に来た時なんか怖がってパチュリーの後ろから出てこようとしなかったもの。アレは驚いたわ…心が傷つくこととはなかったけど、驚いた。うん、驚いた。

結局その時は私と面と向かって話してくれずに終わってしまったのよねえ……何だかねえと思うわ。

まあそんな奴なのよコイツは。って、そんな奴ってどういう事よ……うーん、よく解らないわあ。

「う……うーん……」

あ、起きた。あ、何かキョロキョロしてる。あ、こっちに気づいた。ってあれ？逃げない？寧ろこっちの方をジツと見つめてるわ。一体どういう事？

……まあそんな事どうでもいいか。それより何で倒れてたとか、パチュリーは何処かとか聞かないと。

「こんにちは。そして大丈夫小悪魔？」

「あ、はい。大丈夫です刃奈さん。まだ若干頭がズキズキしますが……」

「そう。それは良かった。しかしアンタ、何で倒れてたのよ？頭にタンコブ作っちゃってさ」

「あー…それはですn「そこだ！マスタースパーク！」「しまっ…！きゃああああ！！」ぱ、パチュリー様あ！？」

あらら…どうやら勝敗は決したようね。フフ…魔理沙も強くなつたわねえ…まあさつきは私に負けたけども。

…って、落ち着いてる場合じゃなかったわね。取り敢えず二人の元に向かいますよう。

「あ、ジナじゃないか。ようやくチェックが終わったのか？」  
「まあそんなとこ。…んーと…その紫もやしh「ぱ。パチユリ  
様！大丈夫ですか！？」…人が話してたのに…邪魔しないでよ全  
く…」

床に突っ伏しているパチユリーに小悪魔が慌てて駆け寄る。私は  
魔理沙に歩み寄り、肩をポンと叩く。

「パチユリーを倒すなんてやるじゃない。魔理沙も徐々に強くなっ  
てきたわね」  
「えへへ…まあな！」

魔理沙は嬉しそうに笑顔で返事をする。

ああ何だろ。何だか彼女の成長を見てるととても嬉しくなっ  
てくる。それは正に母親がこの成長を喜ぶかのような…そんな感じだ。  
…って、それだとまるで魔理沙が私の子供みたいじゃない。何言  
ってんのよ私は…

「しっかし…その…パチユリーだっけ？大した強い魔法を唱えて  
こなかったんだけど…本当に魔女か？」

「ああ彼女はね…喘息持ちなのよ。だから詠唱時間の長い魔法とか  
は唱えられないのよ」

「ふーん…どうりで詠唱時間が短くてシヨボい魔法ばっか唱えてた  
わけか」

「シヨボくて…悪かったわね…」

体をフラフラとさせながら、パチユリーが起き上がる。とは言え、  
小悪魔に支えられて漸くって感じであるが。

「やつほーパチユリー二週間振りー」

「何よその微妙な感じは…まあ確かに最後に会ったのは二週間前の異変以来だけでも…ゲホ！ゲホ！」

「ああ！駄目ですよパチユリー様！また喘息がぶり返ってきて大変だというのに！兎に角椅子に座って下さい！安静にしないと駄目ですよ！」

「はあ…はあ…そうね…座ってないと不味いかもね…小悪魔…悪いけど…薬持ってきてくれる…？」

「は、はい！解りました！今すぐ持ってきます！」

小悪魔はわたわたと慌てながら、喘息の薬を取りに行った。

「ゲホ！ゲホ！…はあ…ツいてないわね…こんな時に戦わないといけなくなるなんて…」

「大丈夫なのアンタ？かなり辛そうじゃない」

「いつもの事よ…まあ…一回しか会ってない貴女には解らないでしょうけど…」

「まあね。別に興味もないし。どうでも良いし」

「どうでも良いって…はあ…最初に遭った時もそう言ったわね…」

「そうだったけ？…まあどうだって良いけど」

私は軽く欠伸をしながら、何となく近くに落ちていた本を拾って読む。初級の火系魔法ねえ…使えたら便利だけど…そうそう簡単に使えるものじゃないしねえ…あ、でも唱えたら割と行けるかもね。

私が本をボーっと読んでいると、パチユリーが溜め息を吐いて口を開く。

「…刃奈。貴女は地下図書館に何の用よ。レミイの所へは此処から  
じゃなくて上からの方が早かったわよ？」

「まあそうなんだけど…ちょっとした用事があったね。此処に寄る  
必要があったのよ」

「用事？用事って…ああ…外の霧のこと？」

「そうそう。あの霧が生物の身体に悪影響を及ぼさないか…そして  
もし及ぼすとして、それは生物を殺すだけの力があるか…それを確  
かめたかったのよ」

「成る程ね…」

パチュリーは意外そうな顔をして此方を見てくる。何よ一体。

「貴女って…結構脳筋かと思ってたけど…意外と考えてたのね。ピ  
ツクリしたわ」

「何よその酷い言い草。言っとくけど、あの時は手段を選んでられ  
なかったからああいう手段に出ただけであって、そうじゃなかった  
らもうちよつとマシな方法で解決してたわよ」

「へえ…そうなの？」

「…何かムカつく」

「まあまあ」

パチュリーは妙に楽しそうに笑いながら私を宥める。その笑顔何  
よ。私をおちよくってんの？

「フフ…何だか意外な一面が見れてちよつと得した気分ね」

「いやそうというのは良いから。さつさと霧について話さないよ」

「はいはい……外の霧の他生物に与える影響というのは全く無い  
といつても過言じゃないわ。あの霧は外の霧は太陽を妨げるだけ  
のみ創られたものだからね」

「ふーん…それって信用出来るの？」

「この霧が原因で生物が死んだのなら、首を差し出して良いわ」  
「そこまで？ …… ああ成る程。アンタがあ霧を発生させたのね」  
「だからそこまで絶対的な自信を誇っているのね」

「そういう事。納得してくれた？」

「まあ一応…あ、そうだ。赤白で脇が空いた巫女服を来た女の子は何処に行った？」

「赤白？ああそれならアッチの方に…」

そう言つて私が入ってきた方とは別の扉を指す。

アッチは確か…空間操作されてなかつたらレミアの居るところまで直で行ける扉じゃない。パチュリーは教えてないだろうから…恐らく、勘で選んだのでしょ…相変わらず恐ろしい勘…

「…刃奈。貴女に一つ忠告しておくわ」

「ん？何よ」

パチュリーは曇つた顔をし、俯き加減に口を開く。

「今のレミイは本当に危険よ。本気で 貴女を殺そうとしている。下手をすれば最近出来たスペルカードルルさえ無視しかねないわ」

「あら…そんなに？ まあそうでしょうね…実の親を目の前で殺されてるんだもの。それ位したつておかしくないわよね」

「…やけに落ち着いてるじゃない」

「まあね。デフィに比べたらあんなの…ちっちゃいお子ちゃまじゃないの。あんなのに負ける私じゃないわよ」

「なら良いけど…でも油断しちゃ駄目よ？幾らデフィさんよりも弱いといえど、実力は確かなんだから」

「まあそうね…って、何でそんなに心配してくれるのよ？アンタはアッチ側の奴なんだから、私にこんな忠告したら駄目なんじゃないわ」

いの？」

何故なら彼女はレミリアの親友。彼女の良き理解者である彼女は、彼女の計画に進んで協力すると思っただけ…外の霧も踏まえて

「確かに…これは不味いことかもしれない…でも…今のレミィに協力したいとは思わないのよ…」

「…タダの復讐鬼でしか無いから？」

「…ええ…そうよ…」

パチュリーは話す度に少しずつ、身体を震わせる

「あの子は紅魔館私たちの恐怖を今一度知らしめるのが目的と言っただけ…どう考えたって嘘に決まってる…だってそうよ…レミィのあんな殺意の籠った目なんて…見たことなかったもの…」

…要するに…パチュリーはレミリアの真意に気づいてしまった。幾ら親友と言えど、復讐なんて虚しいものに手を貸すのは嫌で、それをレミリアにも行なって欲しくない…全く…面倒な奴らね。

「…で？アンタはどうして欲しいの？私にレミリアを止めて欲しいと？」

「…そう思ってたけど…やっぱり止めたわ」

「はあ？止めたってどういっ…」

「刃奈。今すぐ紅魔館レミィから去りなさい」

「…はあ？」

何言ってるんのもやし。今更帰れとかなんの？馬鹿なの？

「おいコラ！いきなり何言い出すんだお前！いきなり帰れとか…何

とかして欲しいのか欲しくないのかどっちなんだよ！」

魔理沙は声を荒らげて文句を言う。文句を言うのは良いけど、取り敢えずその腕いっぱい抱えている本を置いてから言いなさいね。

「…まあ確かに私が行かなければアツチは殺し合いをすることは無いでしょうね。それでアイツらが満足するかは知らないけど」

「確かに満足しないかもしれない…でも…それでこの異変が解決するなら…！」

…全く…この魔女は…頭いいんだか悪いんだか解ったもんじゃないわね。

取り敢えず…このもやしにはこの言葉を送りましょう

「……………アンタ馬鹿？」

「ば…!!? な、何よいきなり！」

パチユリーは腕をジタバタさせて返された事に対して怒りを示す。何故か腕をジタバタさせる度にむきゅむきゅって音が聞こえるけど、まあ気にしない

「あのガキ共がそんな事で止まるはずないでしょ？肉親を殺されてるのよ？しかもそれがもう館の中にいるのよ？止めるはず無いじゃない」

「館の中に居るなんて…知ってるはずが…あ…」

「ふん…漸く気づいたわね。そう…アンタのこのメイドが私と霊夢、魔理沙の侵入を既にレミリアに伝えた。つまり私が此処から帰れば、あのガキは私を追って外に出てくる事になる。つまり私は外であのガキと戦わなきゃならなくなる。」

そしたらどうなると思う？外という広い空間で戦うことになり、動きまわることになり、下手をしなくても他の『生』が失われることになるのよ？アンタそうなってみなさいよ……私に迷惑がかかるのよー！」

「な、何よその理由！訳が解らないわよ！」

そりゃあ解らないでしょうね……だってパチュリーには私の能力について何も教えてないもの。私もそんなにパチュリーの能力は知らないけど

「それによ……わたしはあんなガキには負けられないわよ」

「そうだけパチュリー！ジナはそのレミアアつてのに何か負けたりしない！私や霊夢もいるんだからな！」

魔理沙……フォローしてくれるのはいいけど、取り敢えずその抱えている本の山を元の場所に戻してきなさい。持って帰る気なの？

「……知らないわよ。どうなっても……」

「別に知らなくていいわよ。どうせ……アンタと私はタダの知り合いでしかないんだからね。タダの知り合いがいちいち私のこと心配してくれるとかおかしいし」

「……もうちよつと言葉はないの……？」

「ない。あるわけ無いでしょ？」

「……はあ……何でこんなのに気を遣ったんだか私……」

パチュリーは溜め息を吐いてテーブルの上にあった本を手に取り読み始める。てか喘息は大丈夫なのアンタ？

「パチュリー様ー！お薬持って来ましたー！」

妙に良いタイミングで来たわね。もしかして図ってた？

そんな事を考えている私のことはスルーし、ととつと歩いてパチユリーに薬を渡す。てか本当に怯えてないわね……さっきのタンコブがやつぱり関係あるのかしら？

まあいいか。取り敢えず私は魔理沙と一緒に先に進むとしましよ  
うか。霊夢を待たせるのもなんだしね。

「そんじゃあ私達は行くから。身体には気をつけなさいよー」  
「はいはい……」

何だか投げやりになったパチユリーと様子のおかしい小悪魔のいる地下図書館を後にし、私と魔理沙は先を急いだ…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7517r/>

---

東方聖生伝

2011年10月10日14時55分発行